水澤謙一著

富曾亀昔話集

富曽亀民俗誌
水沢謙一
長岡、富曽亀公民館、1955
pp. 430+12

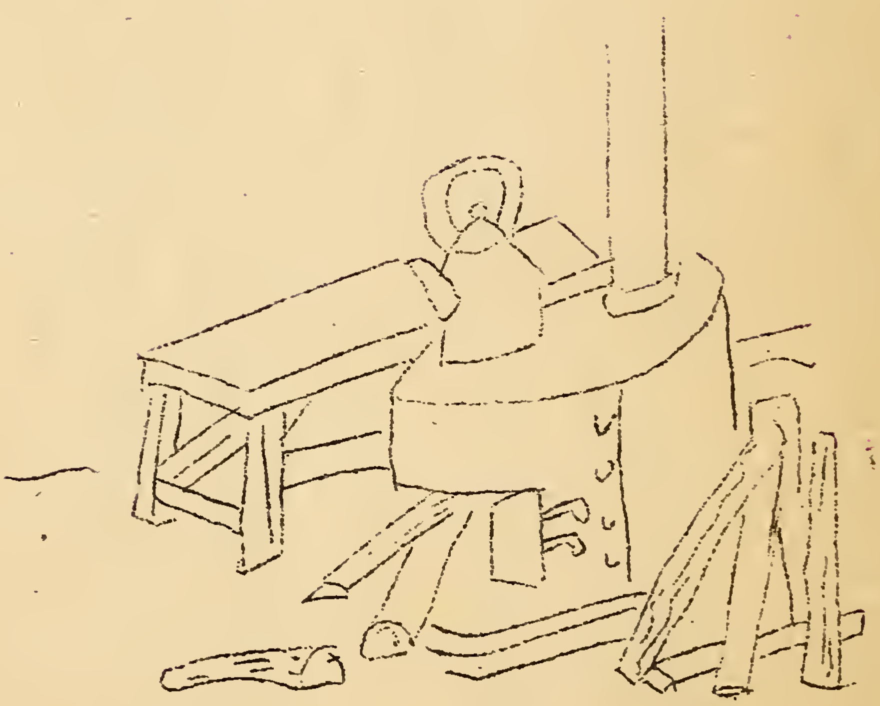
贈

メエイヤー女史殿

一月

水沢謙一

7. 昔話



昔話というのは、単に昔の話とか、古い話とかではなく、古くから口から耳へ、親から子へという工合に口で語り継いで来た話で、しかも特別の形式をもっている話で、富曽亀地区では「ムカシ」と言っている。「ムカシ」とは、「昔あったてんがな」で昔話の第一句が始まるので、この昔話の「ムカシ」である。昔話を言うことを「ムカシヲカタル」と言っている。

昔話の形式

富曽亀では、最初の第一句は、昔あったげろ。昔あったてんがな。昔あったつお。昔あったてや。又はこれを略して、あったげろ、あったてんがな、あったつお、あったてやと言う。何れも昔あったという事で、嘘かほんとうかはとも角も、そういう風に昔から伝えているということを示している。

次に中間の語り方には、昔あったということだ、あったそうだを示す意味で、げろ、つお、てや、てんがな、などの語をつける。

終句として、これで終ったという意味で次のように言う。

いきがさけた。いきがポーン。いきがポーンとさけた。いきがぶらんとさがった。いきがぶらんとさけた。いきがぼっこり。いちがぶらんとさけた。いちがぶらんとさがった。いちがぼっこりさけた。いちがぼっこり。いちがさけた。

これは「一期が栄えた」の意味で、一期即ち物語の人物の一生が安楽に栄えたことで、つまりハッピイ・エンドであったのである。

富曽亀地区の「いちがさけた」などのこれら一連の終句のおさめ方は、「一期が栄えた」のなまりで、その崩れた形であることは明らかである。古志の山村では「いっちごさっかい申した」などと言うところが多く、村々の言い方を比較してみると、はっきり分る。富曽亀のこれだけの言い方を比較しても、「いちがさけた」は「いち（ご）はさか（え）た」の変化であることが判然とする。富曽亀でこの様に各種の語り方のあることは、時代と共にそのもとの意味が忘れられ、時代の変遷で変り、又、特に通婚で村内婚から村外婚への拡張、交通の進歩による文化の交流などで、移り変りがあって今日に及んだことであろう。

次に聞き手は黙ってきいているのではなく、必ず相槌を合わせて、聞き手も相の手の言葉をはさんで、語り手と聞き手でつくり出す一種特別な雰囲気の中に、昔話が進行される。聞き手は普通「サンスケ」と語り手の語尾に対して合槌をうつ。「サンスケ」とは、そうですか、そうだろう、という意味である。

但し、いつも同じ話で飽きて面白くない時などは、つまり話のアッタメカエシなどは、昔話をこわす意味で、次のように言う。
さんすけバラバラ屁こいた。さんすけバラバラ米俵。さんすけバラバラ米俵チーチーがまい出る。さんすけバラバラ行燈けやせばチーチーがまい出る。さんすけバラバラ米ダラ三粒、銭だら三文。

昔話を語るのをさける時

子供に、ムカシ、ムカシとせがまれて面倒臭い時や、もう種切れになった時には、次の如き言葉で止める。
○昔はむけた、この世ははげた、
○昔はむけた、この世ははげた、今の木びきどんの頭ははげた
また「きりなし話」をすると、子供もいやになって聞くのを止めてしまう。

昔話の禁忌

○ヒルムカシを語ると鼠が頭に小便かける。と伝えて来た。昼間昔を語るのは禁物で、語ると鼠が小便をかけるというのである。つまり、昔話は本来、夜、語るべきものであったことを示している。
○また、昔話は普段語るべきものではなく、「話は庚申の晩」の諺もあるように、正月や

盆や節句などのモンブに語るべきものであったらしい。トシトりとか、盆のお花切りとか、彼岸団子とか、正月餅とか、節句などに関係した話の多いことは、この事を暗示しているように思われる。しかも、古老にきいても、昔話は正月にこそ最も語り、また聞くべきものであったらしい。このことは、正月の特に小正月に於ける農の予祝儀礼の時に、トシガンサマに、即ち田の神様に聞かせ申して、神様を喜ばし、其の年の稲作の豊作を祈願するという古い信仰が遠い昔にあったのではなかろうかという印象があるように思われる。

昔話は、本来的には大人の世界のものであって、子供の寝物語りや、正月に於ける単なる娯楽ではなかったらしい。

昔話の意義

昔話は、いつ、誰が作ったのかは不明であるが、昔話が存在するには存在するだけの最初の意義と動機があったことであろうが、長い間にはまた様々の変化のあったことであろう。とにかく何時からか、昔話は前代生活に於ける娯楽となり、また民間の教育手段の一つであったことは事実である。父も母も、祖父も祖母も、その先きの昔の人たちも、みんな昔話をきいて成長し、また大人になっても語り、そして聞いた。昔話の中には、昔の人のしきたりや、日頃の生活の仕方などの、古い考え方などが多くはいっているので、村の

古い姿の研究には大切な手がかりとなります。そこで、出来るだけ多く、富曽亀の昔から伝えて来た話を集めたいと着手したのですが、ここに六十一話ばかり一応載せることにしました。もっと聞いたら恐らく百話は出ると思っています。ここに集めた話は大分崩れているのもあるようですが、昔の素朴な形を伝えているのもあります。

現在は昔話が急速に消えていく時です。これまでにも多くの昔話が消えていったでしょうし、また、その原形も崩れて来たことでしょう。現在は特に消滅の度が激しい。大体、昔のように語りもしなければ、聞きもしない。すでに子供が本を読むことを知っているから、このような口承文芸もうすれて行くばかりです。昔話を知っている一人の古老がこの世を去れば、永久に多くの昔話も消滅していくのです。それで、私も昔話の採集を急いだのですが、未だに所期の成果をあげることが出来ませんでした。私の知る限りでは、亀貝町の勘左エ門のお婆さんという人が、富曽亀では無類の語り手であって、私に語ってくれる昔話を毎晩数えて見たら百以上はあるということなので、喜んで聞書をとり始めたが、時すでにおそく、病気中であってその十幾つを語っただけで、この世を去られたのは、私にとってはまことに悲しくもなつかしい思い出である。

とにかく多くの古老たちの語った話を、出来るだけその語ったがままに、聞書をとったつもりである。

尻尾の釣

　昔、あったてんがな。かわすと狐があったてんがな。かわすが毎日川で魚をとって煮てくていたてんがな。

　或る日、狐が、「かわすどん、かわすどん、いたか。」と言うて遊びに来た。「おーい。た、まあ寄れや」とかわすが答えた。そうして狐はかわすのとこで、魚をさんざごっつおになって帰る時、「こんだは俺とこへ遊びに来てくれ、俺がごっつおをする」と言うたてんがな。

　そこでかわすが狐のところ、或る晩出かけて行った。「狐どん、狐どん、いたか」と言うても一向に返事がない。見ると狐は外に突ったって天上ばっかり見て知らんふりしているてんがな。いくら何を言うても返事もしないんだが、仕方なく家へ帰って、魚を煮ているところ、狐がやって来た。「さっきなた、せっかく来て貰ったが、あいにく天上守りがあたっていたので、返事が出来んで申し訳がなかった。今度こそはごっつおをするから来てくれ」と、またかわすの魚を腹一ぱい食べて帰った。

　かわすがまた狐のとこに行って、「狐どん、狐どん」といくら言うても返事がない。今度は腕組みして地べたばっかり見て知らん顔しているてんがな。仕方がないので家へ帰って

魚を食ているところ　、狐がやって来た。そうしてまたかわすの魚をムシャムシャとごっつおになった。「かわすどん、さっきはせっかく来てもろたが、申し訳がない。あいにくと地守りがあたっていたので、返事も何も出来なかった」と言うて、かわすをたらかした。そうして、「かわすどん、魚てや、どうしてとるもんだ」と聞いたてんがな。かわすは、ようし、この狐め、今度は俺がだまらかしてくっすと思うて、「しみた晩に、古草鞋を尻尾につけて、川へさげておけば訳がない、魚はいっぱいとれる」ときかしたてんがな。

そこで狐は、夜のけのいい、しみた晩に、川端へ行って古わらんじを尻尾につけて川の中に入れてさげていた。寒い晩で、川の水がこおって、キッンキッンと尻尾を引っぱるので、これはいいあんばいだ、魚がかかりはねたと喜んでいたてんがな。

一晩中待っている中に、シラシラと夜が明けてきた。これはまあ夜が明けたが、魚もいっぱいとれたことだろう、尻尾をあげましょうと思って、ひっぱるが尻尾は川の水と一所にこおってしまって取れない。力一ぱいに引っぱるがのげない。

「ねすこんこん、すっこんこん、そうそうのこんで、のげてくれ」と言って、大汗をかいて引っぱっている中に、子供たちがしんばち「しみわたり」をしている声がきこえてくる

「しんぱち、しようや
しようやのかかが

寝ててアッパこいて

宿のカカにかんずけた」としんぱちの唄をうたって、こっちの方をやってくる。狐はもう気が気でない。その中に一人の男っ子が見つけて「狐がいた、狐がいた」と言うて、子供が寄ってたかって来た。丁度、そこへくず屋が来て、「なら、この狐を売ってくれ」と言うて、子供に銭をくれて、狐を逃がしてくれたと。いきがポーン。

馬　鹿　聟

昔、あったてや、或るところに、二人の馬鹿聟があったてや。かかの家へ二人で呼ばれて行ったてや。砂糖をごっつおに出されたので、一人の馬鹿聟は、うまて、うまて、もっとなめたて、どう仕様もなかったてや。

そこで夜になって家のもんが寝てから、こっそり棚探しをしたれば、砂糖がめが見付かったてや。かめの中に手をつっこんでなめていたども、まだろっこなって、かめの中に頭つっこんで、なめていた。その中に頭をのごうとしたが、頭の毛が砂糖にくっついて、どうしてものげないてや。さ――て、困ったことになったわい、と思案している中に、誰か人のくる音がするので、センチンのすみっくらに行ってすくだまっていたてや。そこへも

う一人の馬鹿聟がセンチンにやって来て用をすまして、尻をぬぐうもんがないので、何かないかと、そこらを探したれば、傍に石があったので、その石で尻をぬぐうてゴーンと石を投げたてや。その石が馬鹿聟のかぶっていた砂糖がめにあなってガチャンと割れたてやそこで、

「誰だ。俺に石をぶっつけたのは。」

「いや　どうも、俺だ。尻をぬぐうもんがないので石でぬぐうて投げただけだ。このことは人に言わんでくれ。」

「そうかい、ああいいとも。お前の事は人に言わん。その代り俺が砂糖がめをかぶった事も言わんでくれよ。」

翌日、鶴亀の話が出て、馬鹿聟の一人が、いい気になって話していたてや。そうするともう一人の馬鹿聟が、こってい怒って

「こら。あれほど、かめを言うな言うなと約束したのに、俺が砂糖がめをかぶったのを、何で言うた。お前だって、センチンへ来てからに、尻をふくもんがないので、石でふいたねかや。」と言うたてや。イキがポーンとさがった。

3　馬鹿聟とケイモチ

昔、あったつお。馬鹿　がカカの里によばれて行った。カカの里では、家のもんが子供をぶてカイモチをしてゴッツオしていられる。馬鹿　はカイモチを知らんので見ていた。その中に背中の子供が、おれにもカイモチをくれと言うたら、「何言うてる、これはオッケッケだ。(おっかないもん)食わるもんではない」と家のもんがきかせていらっる・馬鹿聟は、なるほど、これがオッケッケか、どんげのおっかないもんだろう、とおっかながって聞いていたつお。

その中にカイモチが出来たので、「むこどん、さあ、くてくらっしゃれ」といくらすすめられても、おっかながって、いらん、いらんとばっかり、どうしても食おうとしない。そうせば土産に一重箱を家へ持って行ってくらっしゃれと、風呂敷に包んであつけられた。馬鹿聟は仕方なく棹一本借りて、棹のうらったまに重箱をいつけて、それをかつねて帰った・途中で江川をまたぐとて、ひよいととんだら、棹のうらの重箱がすってきて、首ったまへさがって来た。いよいよ、オッケッ・がしかかって来た。これは大変だと重箱を投げて家へ帰った。家へ帰ると婆さが里で何ゴッツオをしてくれられたときかれたので、こ

うこういう訳だと話した。婆さは「それやまた何てこんだ。それはカイモチというもんだはや、重箱をとりに行ってこい」と言うた。

さつきの江川のとこへとりに行ったれば、重箱の蓋から、カイモチの白いとこが出ていたたので、「オッケッケが怒って白い歯をして俺をにらんでいる」と言うて逃げて来たと。

いきがポーンとさけた。

馬鹿聟と団子

昔、あったてんがねえ。馬鹿聟が嫁の里によばれて行った。嫁の里では団子をして食わせられた。あんまりうまいので馬鹿聟は馬鹿食いをした上、家へ帰ったらこしらいてもらつてまた食おうと思って、これは何てもんだと聞いて、団子だとわかった。

家へ帰る時、忘れては大変だと、道道「団子団子団子」と言いながら帰った。道中で江川があったので、「あ　ヘットコサ」と言うてまたいだら、団子を忘れて、今度は「ヘットコヘットコヘットコ」と言いながら帰った。

家へ帰ってくると、婆さが「嫁の里では、どんげなゴッツオがあったか」ときかれたので、「ヘットコ　をして食わせられた」と言うた。婆さが、「ヘットコなんてもんはない」

という た。
「いや、ほんとうにあらし。俺がいっぱいこと食て来たがんに」と言うたら、ヨロブチで火をたいていた婆さが怒って、「この馬鹿めが」とカギサマを馬鹿聟のひたいつらにぶっつけた。そうしたら婆さが、「お前があんまり馬鹿だから、それ見ろ、団子のような瘤が出来たねか。」と言うた。馬鹿聟は、「それ、それ、その団子てがをして食わせられたがだ。」と、やっと気がついて言うたてがな。いきがポコリとさがった。

馬鹿聟と炬燵

昔あったてや。馬鹿聟が嫁の家によばれて行くことになった。親婆さが、「よばれて行ったら、ぎょうそうよく（行儀よく）しているもんだれ。人のすることをよく見て、その通りするもんだ。」と、よく言いきかした。
馬鹿聟が行くと、「さあ、よく来てくらした、まあ、炬燵にあたってくらっしゃい。」と言われたが、馬鹿聟はよその家の炬燵というもののあたり方を知らないので、どうしてあたればいいかわからないだんが、「あい」と言うて、見ていた。そこへ猫が一匹きて、炬燵のこっちべたから入ったかと思うとあっちべたへツルンと出て、どっかへ行ってしも

た。馬鹿聟は、なるほど、これが炬燵のあたり方か、俺も猫の真似をしようと思うた。聟の布団をまくって、こっちべたから頭を入れて、やっとこであっちべたへ抜け出ようとして着物に火をつけて、大騒ぎをしたてや。いきがブランとさがった。

6 馬鹿聟とせいふろ

昔、あったてんがな。カカの里によばれて行く時、親婆さが、「よその家に行ったらばぎょうそうよくしているもんだれ。まんま食た後は、茶わんに湯を入れて飲むもんだ。湯が熱い時はコウコウ一切れを入れて、茶わんをなでて飲むもんだ。」とよくきかした。

カカの家へ行ったら、「さあ、よく来てくらした、先ず湯へ入ってくらっしゃい。」と言われた。馬鹿聟は「お湯はまんまくた後でいい。」と言うたが、どうでも先に入れと言われたので、せいふろに入ることになった。

せいふろが少しあついので、コウコウ一本くれと言うてもらった。せいふろの湯を、ガボガボとかきまわしては、コウコウをあくんとかみ、ガボガボとかきまわしてはあくんとかみ、とうとう、せいふろの湯をみんな飲んでしもた。いきがポーンとさがった。

(へんけとうろうし)

7 カイモチと小僧

昔、あったてんがな。或るお寺にカイモチの大好きな和尚がいたと。和尚はカイモチを檀家からもらってくると、小僧には呉れずにいつも自分ばっかで食べていた。

或る日のこと、和尚はまたカイモチを貰って来てうまそうに食べて残りを戸棚にしまって他家へ出かけた。

留守居をしていた小僧はそのカイモチが食いたくてたまらない。あっちこっちを探してカイモチを見つけて盗んで食てしまった。さて和尚が帰ってこられたら何としようとて考えていたが、こりゃいい事があると、本堂の金仏の口にアンコを塗りたくっておいたてんがな。

その中に和尚が帰って来て、戸棚のカイモチを食べようとしたら、皿には一つもないと。そこでこれは小僧が盗んだと思って、

「小僧、小僧や、ここへ来い」

「ハイ」

「お前だろ、カイモチを食べたのは。」

8　皆殺しと半殺し

昔あったてや。或る家に旅人が泊った。そこん家の婆さと姉が話していたてや。「ごんにやのお客には何したらいい。」「そうだな、みなごろしか、はんごろしでもしたらいい。」旅人はこれをきいて、これや大変だ、殺されてたまるもんかと、早速逃げ出してしもたと。みなごろしは餅のことで、はんごろしはかい餅のことで、飯粒のつぶしかたでそういうがんだ。いきはポーンとさがった。

9　親捨山

昔、あったてや。或るところに孝行息子があって、婆さが山へ捨てられる年頃になったので、泣き泣き親をぶて山へ行った。行く途中、婆さは息子にばれながら、胡麻を一つかみ持っていて、それをばらばら撒いていた。息子が不思議に思うて聞いたら、婆さは、おらはもう山へ捨てられてしもうが、もしおれに会いたい時には、この胡麻の芽をたよりにくるように、お前のために撒いておくのだと言うた。息子はそれを聞くと、婆さを山に捨てることが出来ないで、家へぶて来て隠しておいたてや。

或る年、殿様から灰の縄を持って来たものに褒美をくれると言い出された。息子は婆さにきいたら、縄に塩をかけて燃やせば訳のないことだと言うた。その通り灰の縄をもって殿様に出したら、こっていい褒美をもらって、訳を殿様にきかれたので話したら、それからは年寄りを山にすてないことになった。いきがポーンとさがった。

10 テンポコキくらべ

昔、あったてんがなあ。上州と越後にテンポコキがいた。どっちが偉いか、テンポコキくらべをすることになった。そこで先ず上州のテンポコキが越後に来ることになった。道をききき、越後のテンポコキの住んでいるオトシ村に着いた。その家に行くと、子供が二人外で遊んでいた。

「なら、なら、ツアツアとカツカアはいらつるか」

「ンねえ、いらんねえ」

「そうかい。ツアツアはどこへ行かれたや。」

「ツアツアは天笠が破れたので、蚤の皮千枚、虱の皮千枚持って、天笠をなおしに行かれた。」

「そうかい。カッカアは」
「カッカアは彌彦山が傾がったので、オガラ三本持って、彌彦山を起しに行かれた。」
「そうかい。それははつめいのことだ。ところで、この間の風で、奈良の大仏様の釣鐘が吹き飛んでこなかったかい。」
「そう言えば、軒場の蜘蛛のヤジにひつかかって、ブラチャラしていたつけが、どうなったかいな。」
上州のテンポコキは、これは子供ながら、いい加減の奴だわいと驚いた。
子供が棹をいぢっていたので、
「なら、なら、棹で何するや。」
「おら、天竺の柿をもがし。」と言った。
上州のテンポコキは、子供さえも、こんなのであるから、この親のテンポコキは、もっとゴウギな奴に相違ない。これでは、とてもかなわん。と思って、越後のテンポコキには会わないで、あわてて上州へ逃げ帰った。
イチがポッコリ。

11 馬鹿聟とあんころ餅

昔、あったてや。

あるところに馬鹿聟があったてや。かかの里によばれて行った。行く時に、婆さから、「お前はよその家へいったら、行儀よくするもんだ。人のすることをよくまねせば、まちがいがない。」

かかの家によばれていったら、せいふろにはいってあがると、その後で別の人がはいった。その人は、黒いつぎでつくった糠袋で顔を洗ったり、手をこすったりしている。「なるほど、よその家てや、黒いもんで顔をなでるもんか、いやわかった」と思って見ていたと。

その中に夕飯になって、あんころ餅が出たてや。その黒いあんころ餅をつかんで、顔をぬったり、手をこすったりした。そうしたれば、かかの里の衆も、あきれ返って、こんな馬鹿に可愛い娘をやっておかれんと、娘をもどした。いきがポーンとさがった。

「いいえ、私は食べません」
「いや　お前が食べないで誰が食くる。」
「そう言えば、さっきながた本堂の方で、変な音がしました。」
小僧は本堂へ来て
「和尚さん、和尚さん、カイモチ泥棒はここにいました。この金仏様です。」
「何、馬鹿言うな。」
「いや、ほんとうのことです。金仏の口にアンコがついていますがな。」
「どら。ほんとだ、この泥棒め」と和尚は箒をもって来て腹立ちまぎれに金仏様をたたきつけた。そうすると金仏様はクワン　クワンと鳴るてんがな。和尚はこれをきいて、
「小僧、金仏は食わん　食わんと言うているが、おかしいぞ。」
「和尚さん、食わんと言うても、口ばたにアンコがついている。剛情な金仏だの。そんげの証拠があって、しかもいくらたたかれても食わん、食わんでは。それならばいい事があります。今度は水攻めにしましょう。庭の池の中に放り込んで水攻めにしたら、いくら剛情でも白状するに相違ありません。」
と言い乍ら金仏様を池の中に投げ込んだてんがな。金仏様は中が空っぽなので、中へ水が入って、クツタ　クツタと音を出して沈んだと。イチヤポッコリ。

猿とふき蛙

昔あったてんがな。或る村に猿とふき蛙がいたてんがな。山の下の村から、正月餅を搗く音がきこえてくる。猿は正月餅が食いたくてたまらないんだが、ふき蛙と相談したと。ふき蛙は赤ん坊の泣き声のまねをして井戸の中におちる。そのこまに猿が正月餅をとろうということに相談がまとまったてんがな。そこで猿とふき蛙は、村の家へ正月餅をとりに出かけた。ふき蛙が赤ん坊の泣き声のまねをして、オギャアオギャアと泣いて、バッチャンと井戸の中におちてたんがな。そこの家では、そりゃ赤ん坊が井戸に落ちた、これは大変だ、と餅つくのをやめて、赤ん坊を助けるとて大さわぎになった。そのこまに、猿は臼ぐちら餅を盗んで、山の天上へ来て、ふき蛙のくるのを待っていたと。

そこの家では赤ん坊がほんとうに井戸の中に落ちたかと、本気になってあげてみたらばふき蛙だったので、この奴め、人をたらかしてと、さんざんにいじめられて、やっとこ猿のとこへ逃げて来たてんがな。

そこで猿とふき蛙は、さてさてこの正月餅を二人で食うにはどうしようかと相談したてんがな。猿はこんげにうまげな餅をふき蛙に分けてくれるのがあったらもんでどう仕様も

ない。自分一人で食いたくてたまらない。そこで山の上から餅を入れた臼をころがして、臼についていったもんの取ったがちに食わうということになった。そおして山の上から、餅の入っている臼をコロコロところがしたてんがな。ふき蛙はパッタラ　パッタラとついて行った。猿はどんどんとついて行った。臼はコロコロとだんだん早くころがって行く。猿も早いのでどんどんと追いついて行く。ふき蛙は、パッタラ　パッタラとおくれてついて行った。ところが途中で臼の中の餅がころがり出て、つつじのカブツに引っかかったてんがな。猿はそれを知らずにどんどん臼について行ったてんがな。後から来たふき蛙は、大喜びでつつじの根っこで、その正月餅を食ていたてんがな。猿は臼について山の下まで行っては見たが空臼なので、あわくて戻って来たと。そおしたればふき蛙がつつじの根っこで、正月餅をうまそうにして食ていて、餅がつつじの枝からたれ下っているてんがな。

そこで猿は、

ふくどん、ふくどん、下った方から食われも。」と言うたら、ふき蛙は

「下った方から食わうとも、上った方から食わうとも、ふくがもんはふくの好きだ。」と言うたてんがな。イキがポコリと下った。

きりなし話　上方詣り

昔、あったツア。ヘンビとガエルが上方詣りをした。ヘンビがズーッとずると、ガエルがピョンととぶ。ズーッとずっちゃ、ピョンととぶ。ズーッとずっちゃピョンととぶ。

……………いつまでも繰り返してきりがない。

屁

昔、あったてんがなあ。爺さと婆さがあったてんがなあ。爺さはニヤをはいて、稲の穂を一つ拾った。婆さは横座をはいて、豆一つ拾うたてんがなあ。

そこで婆さはこの穂と豆を煎って食わうと言うた。爺さはいや、いや、来年の種にしようと言うた。仕方がないので婆さは、穂と豆をしばってニヤへぶらさげておいた。

やがて雪消えの春山の頃となり、爺さは山へタキモン切りに行った。婆さはこん時とばかりにルスゴトをしようとて、ニヤにつるしておいた豆と穂を香煎にひいた。それをメンツの蓋の中に入れて、ペランペランとなめていたてんがな。そこへ山から爺さが上って来

たので、婆さはたまげて、そこらにかくすひまなく、ケツの下にかくして知らん顔をしていた。すると大きな屁がブーッと出たてんがなあ。ケツの下の香煎が吹き立って、婆さの目の中に入って、目が見えなくしもたと。そこで婆さはルスゴトのわけを話して、爺さにあやまった。爺さは婆さをゆるして見えなくなった目をなめてくれたら、目があいたと。
イチがポッコリ。

狐と山伏

昔、あったてがな。桂という村に仙光院という山伏があったてんがな。今日は一つ夏まわりをしようとて、宮路村と麻生田村の道を通っていると、道ばたに狐が一匹、こうこうといびきをかいて眠っていた。この狐め、いつも人をだましているすけえ、今日という今日は、俺がいじめてくつろうと思って、でっこいホラ貝を、狐の耳にあてて吹きたてた。狐はたんまげて起きたと思うたら、もうどっかへ逃げて消えてしもたてんがな。

山伏は、狐め、ざま見ろと喜んで、宮路をまわって宮下村へ行って、昼飯でも貰うと思って歩いている中に、まだ昼間だがに急にあたりが暗くなってしもた。これは困ったが仕方がない宮下の勝太郎どんに願うて泊めてもらうことになったてんがな。勝太郎どんトッ

ツアが俺は用事があるから、ちょっこら行ってくるすけ留守居してくんなしょ。まあ、火でもたいて一服してくんなしょ。おらカカは病気で寝ているが、淋しがって時々「トッツア」と呼ぶすけ、呼んだら「オーイ」と返事してくんなんしょ。と頼んで出て行ったてんがな。

山伏は一人で炉端で休んでいると、やがて病気のカカが「トッツア」と気味の悪い声で呼ぶてんがな。山伏は「オーイ」と返事したが何とも気持が悪い。何度か呼んだり返事している中に病気のカカがネドコから這い出して、髪をぼうぼうとして真蒼な顔して「トッツア」「トッツア」と言うて山伏目がけて這うてくるてんがな。山伏な、これは化物だ。つかまっては大変と、おっかなくなって逃げ出して、家の外の木に登ったてんがな。そうするとカカも「トッツア」「トッツア」と言い乍ら、這うて追いかけて来て、木につかまり始めるてんがな。山伏はいよいよおっかなくなって、木のてん上へてん上へと登って行くてんがな。カカは「トッツア」「トッツア」と言いながら木に登りかけるてんがな。山伏は「オーイ」「オーイ」と言いながら、木のしんぶら（木のてん上）へと逃げる中に、しんぶらの細い木なので、折れて下の川の中へドブンと落ちてしもたてんがな。

川下では子供が水泳ぎをしていたので、あれまあ仙光院が流れてこらっるがと言うてたんまげた。その声に仙光院が気が付くと、今は夏のまっぴる中なので、さては、狐に一ぱ

い食わせられたかと思うたと。いきはポーンとさけた。

16 爺さと鬼

昔、あったてや。爺さと婆さがあった。二人とも心がけのよい人であった。或る日、爺さは、婆さからヤキメシをつくってもろうて、山へしば刈りに行ったてや。

ヒンメシ頃になったので、ヤキメシを食わうとしたれば、ころころところがり落ちてしもうたてや。爺さは「ヤキメシ、ヤキメシ、待ってくれ」と言うて、ころがるヤキメシの後を追うて行ったれば、ヤキメシは深い穴の中に入ってしもた、爺さは穴の中を追いかけていったら穴の奥に地蔵様が立っていられた。

「地蔵様、地蔵様、ここへヤキメシがころんでこなかったかの」

「ころがって来たども、俺がくてしもた」

「そうかの、お前様は食わしたのだら、いいでの」

すると地蔵様は言わしゃった。

「爺さ、爺さ、いいことがあるから、俺の手の上に上れ」

「もったいない。何でお前様の手の上に上られましょうば」

「いや、かまわんから遠慮しないで上れ」
爺さは、ことわったども、あんまり上れ上れと言われるので上った。すると、また地蔵様が言わしゃった。
「爺さ、爺さ、俺が肩の上に上れ」
「もったいない。何でお前様の肩の上に上られましょうば」
「いや、かまわんから遠慮しないで上れ」
あんまり上れ上れと言われるので上った。すると、今度は、地蔵様が言わした。
「爺さ、爺さ、俺が頭の上に上れ。」
「もったいない。何でお前様の頭の上に上られましょうば」
「いや、かまわんから遠慮しないで上れ」
あんまり上れ上れと言われるので、爺さは仕方なく頭の上に上った。そうして地蔵様が、
「爺さ、爺さ、今夜ここへ鬼共がばくちにくるから、このミノを着て箕をパタパタとたたいてな、鶏の鳴き真似をしたがいい」と言わっしゃった。
夜になると、青鬼や赤鬼がガヤガヤと来て、地蔵様の前でザラザラと銭出してバクチを始めたてや。爺さはおっかなくてどうしようもないと。それでも地蔵様の言わっしゃった通りに、いい頃を見て、箕をパタパタとたたいて鶏の羽ばたきの真似をして、「コケコッ

コウ」と言うたれば、鬼共はたまげて「そら夜が明けた」と言うて、バクチの銭を出したまんまにして、ンな逃げてしもたてや。そうすると、地蔵様は、「爺さ、爺さ、その金をお前ンな持って行くがいい」と言わしゃった。爺さは喜んで、その金を家へ持って帰ったてや。

家へ来て爺さと婆さが喜んで銭勘定しているどこへ、隣の婆さが火貰いに来て、「その金どっから出したい」ときいた。それで、いや、実はこうこういう訳だと話した。

隣の婆さは話をきいて、「おら爺さは、火休め隅で松へんぐりばっかりたいて、一向と銭とり金とりしられない。」と言うて帰ってきた。

翌日、隣の悪い爺さは、ヤキメシを持って山へ行って、ヤキメシをわざところがして、穴の中へおとした。そうして地蔵様のどこへ行って、「地蔵様、地蔵様、ここへヤキメシがころがって来なかったかの」と聞いたれば、地蔵様は「べとだらけになったども、俺がくてしまたや」と言わしゃった。

そうしてまた地蔵様の言わしゃる通りにして待っていると、鬼どもが来てバクチをはねた。悪い爺さは「ケケケッコウ」と言うて、鬼どもがみんな逃げない中に「アハハハ」と大声で笑ったので、鬼どもは、昨夜の奴はこの爺さだと言うて、さんざんにたたかれ、血だらまっかになって帰ったてや。いきがポーンとさがった。

17 ほととぎすとかっこう

昔、あったてや。あるところに二人の姉妹があった。姉は大変によい子で、いつも妹をいたわっていたてや。妹は大変に悪い子であったと。姉は毎日、山へ行って、山いもを掘って来て、それを焼いて、よい所は妹に食わせ、わるい所は自分で食ていたてや。或る時、姉が眠っている時、妹は俺にこんなンまいいもんを食わせているのだから、姉は手前ではどんなンまいもんを食ているのだろう、と思うて、姉を殺して腹をさいて見たれば、姉の腹の中は、真黒けにこげたいもばかりだてや。妹はあんまり驚いて、ああ、俺が悪かったと言うて泣いて血を吐いたと。それで妹はそのまま、ほととぎすという鳥になってしもた。姉はかっこうという鳥になった。いきがポーンとさがった。

18 長い名

昔、あったてや。或る家で、子供が生まれては死に、生まれては死ぬので、どうしたらよかろうと寺の和尚さんに相談したてや。そうすると和尚さんは、長い名をつければ長生き

をすると言われたてや。そこで子供が生れたので、和尚さんから長い名をつけてもろうた。その名は「金銀くろめたたつさい申せば鍋の下ごんたかしったか薬師のはげ山別当ふきんのいん助」というがだと。

和尚さんの言われる通り、長い名をつけたので、五つ、六つまで生きて来たので大変に喜んでいたてや。

ところが或る日、その子が川の中に落ちてしもたてや。一所に遊んでいた子供が、その子の名を言うて家にきかせに来た。その子の名があんまり長いので、その子の名を言うこまに、その子が死んでしもたてや。

そこでまた子供が生れたので、和尚さんに相談して、今度は短くて長生きする名をつけてくれと頼んだら、和尚さんはよう考えてから、米造という名をつけてくれた。よねという字は米で、八十八まで生きる意味だと言わした。その子は長生きしたてや。いきがポーンとさけた。

狐とたにし

昔、あったてや、或るとこに五百年もたった狐がいたてや。そうして或る日のこと、

「俺は神通力を持っているので、この沙婆におっかないもんは一つもない。何をしてもこの俺に勝るものはあるまい。」と大いばりをかいていたてや。

そん時、田んぼでケラケラとでっこい声で笑うもんがあったので、狐は、けしからん奴だと思うて、

「誰だ、今笑っている奴は」と言うた。すると田んぼの中から、たにしが「あんまりおかしくて、お前を笑ったのだ。俺は千年も生きているたにしだが、何をしてもお前よりも、ごうぎだぞ」と言うた。そこで、狐は、よし、競争してやろう、俺は神通力で走るから、たにし如きに負けっこないと思うて、「そりゃば、お前と俺と競争するか。向うの山のふもとまでだぞ」。そうして一、二、三で走り出したてや。その時、たにしはすばやく狐の尻尾にチョイとつかまった。そんなこととは知らずに狐は一目散に走った。山のふもとについたが、たにしの姿は見えない。そこで、狐は、「高の知れたたにしの奴め、何で俺に勝てるものか」と言うていばった。そうするとまたもケラケラと、でっこい笑声がするので見ると、たにしがいて、

「俺はさっきからお前を待っていた」と言うたてや。狐は、

「そりゃば、もとのところまで、もう一ぺんかけくらべをするか。」と言うた。

そこでまた一、二、三でかけ出した。狐は今度こそ負けるもんかと、歯がみかいて走っ

た。その時もやっぱりたにしは狐の知らんこまに尻尾につかまっていた。そうしてもとの場所につくと、たにしはすぐに下りて、

「俺はさっきからお前を待っているが、なかなか遅いじゃないか。」と笑うていた。いきがポーンとさがった。

鼠と蛙

昔、あったてんがな。鼠と蛙があったと。鼠が流しで飯粒を拾うていたてんがな。そん時。蛙はせせなばたで遊んでいた。そうして蛙が、

「鼠どん、鼠どん、二人で上方参りをしろねか」と言うた。そこで鼠が、

「それや、よかろ、なじょも」

二人で旅仕度をして出かけたところ、途中で川があったてんがな。そこで鼠が、

「蛙どん、蛙どん、お前は水かきがあるので泳げるが俺は泳げない。そりゃすけ二人で足をしばって一所に川を越そう。」と言うた。二人は足をしばって川を渡りかけた。蛙はこの鼠の奴め、いつも俺をいじめているから、今日という今日は困らしてやれ、と思うて、川の底ったまにもぐってしもた。そうすると鼠は一所にもぐって水をコッテコトのんで死

んで、しまいには水の上に浮き上って来たてんがな。とんびがそれを見つけて、さらわうとしたてんがな。蛙はこれは大変だと思うたが、足がしばってあるので、自分だけ逃げることができん。それで、とんびに、

「とんびどん、とんびどん、俺のおかげで、お前はこの鼠を食うことが出来たのだから、俺だけは助けて離してくれ」と言うたてんがな。するとどとんびは、

「友達を殺すようなものは、先ずおさまから先きに食てしもうぞ」と言うて蛙をくてしもた。いきがポーンとさがった。

笠　地　蔵

昔、あったてや。貧乏もんだがよい爺さと婆さがあったてや。年の暮れに婆さが、ぬのばたを織って、爺さがそれを持って、トシトリガイモンに行った。ところが原なかの地蔵様が、ビショビショと降るみぞれにぬれて、笠もなく立っていらっしゃるてや。爺さは、「ああ、これはまことにお気の毒な事だ。町へ行ったら早速、笠を買うて来て、かぶせ申しましょう」と思って町へ行ったてや。

町へ行ってぬのばたを売って、笠を買うたり、おけさも買うたり、頭巾も買うたり、よ

だれかけを買うたりしている内に、銭がすつかりたいてしもたてや。爺さはトシトリガイモンは何も買わずに帰ってきた。帰りに地蔵様に笠や頭巾をかぶせたり、おけさやよだれかけをかけたりして、いい機嫌で家へ来た。

「婆さ、婆さ、今帰って来た。町へ行ってぬのばた売った銭で、原中の地蔵様がお気の毒なので笠やらいろいろ買ったら、トシトリガイモンする銭が無うなったので、何も買ってこなかった。」と言うた。婆さは、

「そうかい。そうかい。それや善いことしてくりやった。また稼げばそれ位の銭はとりやるし。」と言うて喜んでいたてや。

　爺さと婆さが寝て夜中になると、ギシリギシリと車の音がして来た。そうして

「甚兵エの家はどこだ、どこだ、」と言うので、

「甚兵エの家はここだ、ここだ、」と爺さが答えた。

「お、甚兵エよ。先程はまことに有難かつた。お前さんの親切のほうびとして、トシトリゴメ、トシトリザケ、トシトリザカナをこの車につけて来たぞ。」と言わしやった。原中の地蔵様がお礼に来られたのだと。それから甚兵エの家は、いいことばつか続いた。いきがポーンとさがつた。

和尚と小僧

昔あったてんがな。或る寺に和尚と小僧があったてんがな。和尚は大層ケチンボで、いつも小僧を早く寝して、自分だけ一人で、甘酒をわかして飲んだり、餅を焼いて食ているてんがな。小僧も甘酒が飲みたいやら、餅が食いたいやらで、たまらないてんがな。どうかしてうまい考えはないかと、寝て色々と思案したてんがな。

翌朝、朝のお勤めがすむと、小僧は、

「和尚さん、和尚さん、今日から、おらが名前を替えてくんなさい。これからイイカンフてがんにしてくんなさい。」

和尚は、

「そうか。よしよし。」

その晩の事。いつものように小僧が寝てしもうと、和尚は甘酒をわかし始めたてんがな。もうわいたかと味見しようと、茶碗に汲んで一口飲んで、

「いいかんだ。あー、いいかんだ」と言うたてんがな。すると小僧はガバッとはね起きて、

「ハイ、何用でございます。」

と言うて和尚のとこへ行ったてんがな。
和尚は
「何だ、お前は。」と言うたてんがな。
小僧は「ハイ、和尚さんがイイカン、イイカンと呼ばれたので、何用かと急いで参りました。」と答えたてんがな。和尚は仕方がないので
「あ、そうか。それはな、お前に甘酒飲ましょうかと呼んだのじゃ。早う飲んで寝るがいい。」
と言うたてんがな。小僧は大喜びで甘酒を飲んで寝た。
和尚は今度は餅を出して焼き始めたてんがな。餅が焼けると、フーッ、フーッと吹いたり叩いたりしているてんがな。また小僧が、
「ハーイ、何用でございますか」
と言うて起きて来たてんがな。和尚は、
「何だ、お前は」
と言うたてんがな。小僧は、
「ハイ。和尚さんが、フーッ、フーッと呼ばれたので何用かと急いで参りました。」と言うたてんがな。和尚は仕方がないので、

「あ、そうか。それはな、お前に餅を食わしょうかと呼んだのじゃ。早う食て寝るがいい。」

小僧はまた大喜びて食て寝てしもた。

その翌朝、朝のお勤めがすむと、和尚は、

「小僧、小僧、遊びに行ってこい」と言いつけたてんがな。小僧は遊びへ行った振りをして、寺の縁の下にかくれていたてんがな。

和尚はこの留守に甘酒を飲もうとてわかしたてんがな。たいがいになると味見して、

「いいかん、いいかん」と言うたら、小僧が「ハーイ」と言うて、急いで縁の下から出て来たてんがな。仕方がないので、和尚はまた小僧に飲ませて、

「小僧、小僧、甘酒飲んだら遊びに行ってこい。」と言われて、子僧は遊びに行った。今度は餅だろうと思うて、餅の焼ける頃を見はからって寺へ帰って来たてんがな。案の定、和尚は餅を焼いていたが、あわてて灰の中にかくしてしもた。小僧は、

「和尚さん。只今帰って来ました。遊びに行って家の建つのを見て来ましたから、その話をしましょう。」

と言うて、火箸を持って、

「家を建てる時には柱がいる。柱を先ずたてて」と言いながら灰の中の餅の上に、ズブリ

と火箸をたてた。そして、
「はて、この柱の下にあるものは何でしょう。」
と言うと、和尚が、
「それか、それは土台石というもんだ。」と言うた。小僧は「成程のう」と言うて、餅を火箸でさし上げて、しげしげと見たてんがな。和尚は、
「小僧、お前食べたらよかろう」と言うた。いちゃぶらんとさがった。

山の出し合い

昔、あったてんがな。或る山に住んでいた蛙やがまやむかでなどの山の動物が、出し合いをしてゴッツォをして食う相談をしたてんがな。相談がまとまって、今度は誰が町買物に行くかを決めることになった。そこで、誰よりも足のいっぱいのむかでならば早くてよかろうという事で、使いに行くことになった。むかではいまかごをぶて、いそいそと支度をし始めたてんがな。やがてその中にむかでがもう町から帰って来そうげな頃となった。みんなで待てども待てども、なかなか帰って来ないてんがな。
「はてまあ、むかでの奴は一体何をしているのだろ。一向と帰ってこないが。」

みんなが待ち切れずに言うたてんがな。するとみんなの後の方で、その時、「エヘン」と咳ばらいするもんがあった。見るとむかでである。みんな喜んで、「おー。お前は帰って来たかや。御苦労だったな」

と言うたてんがな。

するとむかでは、

「なあに、俺はこれから町へ行くのだ。この足の一つ一つにワラジをはかせて、これから行くとこだ。」

と言うたてんがな。いちがぶらんとさがった。

爺さと鴨

昔あったったてんがなあ。或るとこに爺さと婆さがあったてんがな。爺さの田んぼに、鴨がいっぱいおりてくるてんがな。爺さは何とかしてこの鴨をとりたいもんだと、思案したてんがな。そうしてモクロジの珠に糸をつけて、それを鴨に飲まして生け捕りにしてやろうと考いたてんがな。

そこで婆さからモクロジの珠を、いっぱいこと集めてもらった。そのモクロジの一つ一

つに糸をつけて、田んぼにちらかしておいたてんがな。爺さはその糸を束ねて、手にしっぱり持って、かくれて鴨の来るのを待っていたてんがな。

やがて鴨がこったいこと（沢山）おりて来て、モクロジを田んぼのツブ（たにし）だと思うてからに、ばかになって拾うて食うているてんがな。

もうよい頃だと思うて、爺さが姿を現すと、鴨はたんまげて、一せいに飛び出したてんがな。そのごうぎないせいで、爺さは鴨を生け捕りにするどころかや、手前が空にぶらさげられてしもたてんがな。爺さはすっかりたんまげて、

「大変だ、大変だ、誰か助けてくれ」

と足をバタバタしたども、爺さの体はだんだん遠くへ運ばれていくてんがな。

やっとこすっとこで、或る村のお寺の高い屋根につかまって、

「助けてくれ、助けてくれ」

と、大声に呼んだれば、お寺の和尚さんも、小僧さんも、村の衆もいっぱいこと集って来て、ワイワイと大騒ぎになったてんがな。そうして、この爺さをどうして助けてやろうと考いたあげく、村中の家から、いっちでっこい風呂敷を持って来て、それを継ぎ合わして、ここへ飛びおりろと言うたてんがな。爺さは大喜びで飛びおりたとこてんが、風呂敷を持っていた村のもんの中に、ひとどこ弱いとこがあって、爺さがおりた拍子に、風呂敷が

手っぱずれて、爺さは石にコキーンと、ごうぎにぶつかったてんがな。そん時、爺さの目から火が出て、そのためにお寺が火事になって焼けてしもたてんがな。いちがぶらんとさがった。

大年の客（一）

昔、あったてんがなあ。あるところに爺さと婆さがあった。年取の夕方、七ッ頃のこと、さて、これから年を取りましょうと思って、ふと外を見ると、一人のザトンボが、家の大門を曲ってくるてんがな。やがて家にくると、

「今夜、おそくなって家へ帰られんので一晩泊めてくんなんしょ。」

「年取りの晩だがんに、そりゃ又何てこんだ。家に帰るんだとし。」

「いや、盲目で夜道は遅くなっては、どうしても帰らんねえ、泊めてくんなしょ。」

「あい。そいだば泊ったがいい。さあ、夕飯でも食べてくらっしゃれ。」

「いや、夕飯はいらん。何せ寒くてどうしようもないので、早う寝して貰う。」

と言って寝ようとしたが、

「アキの方はどっちだい」

「なんでかい」
「明朝、若水を汲まして貰うと思うて」
「そうかい」
さて、ザトンボは飯も食わんで寝てしまった。やがて年が明けて朝早く、井戸で水を汲む音がする。
「この寒いのに早うから若水なんか汲まんでよいから、ラックラ寝てくんなしょ。」と言うても一向きかずに水を汲んでいる。その中にダボーンと大きな音がして、ザトンボは井戸の中に落ちてしまった。爺さと婆さは大急ぎでかけつけて、井戸の中へ縄を下げてやった。井戸の中でザトンボは縄につかまり、
「俺を引き上げる時に、お前さん方は〈身上がや〉と言うてくれ。すると、俺は、〈上るや〉と言うから、そうしたら上げてくれ。」と言うた。その通りに爺さと婆さが「身上がや」と言うと、ザトンボが「上るや」と言ったので井戸から引き上げた。
さぞ寒かったことだろう、さあさあ、火にあたってくれ、と言うても、いや、火よりは布団の中でもう一眠りさせて貰う、と言って又寝てしまった。
やがて夜が明けたので、雑煮が出来たからといくら呼んでも返事がない。寝床へ行って

見ると、布団の中にはザトンボが居ないので、驚いたことには金貨がザクザクしていた。さては福の神様がまい込んだと喜んで、金勘定している所へ、隣の婆さが来て、根掘り葉掘り聞くので、みんな聞かせた。

さて、その年の年夜になると、隣の爺さと婆さは、ザトンボが通らないかと待っていた。そこへ一人のザトンボが通りかかったので、いやだと言うのに無理矢理に泊めた。年取りのゴッツォを沢山食べさせた。そして明朝は早く若水を汲んでくれと言うた。

その元日の朝、早く起こして、若水を汲ませ、そして井戸の中に突き落した。そして縄を下げてやりながら、

「井戸の中から上げてやるから、俺らが（身上がや）と言うたらお前は（上るや）と言うてくれ」

その通りにしてザトンボを上げた。ザトンボはぶるぶるふるいて、寒いからあたらしてくれと言ったが、爺さも婆さも、いやいや寝てくんなしょ、とザトンボを寝させた。そして雑煮をして起したら、ザトンボはドッサリ食べて、ゴッツォサマになりましたと言って帰ってしまった。イチがポッコリ。

大年の客（二）

昔、あったてんがな。年の暮れのこん（事）だと。一人のざとんぼがペンコペンコ（三味線）ひきながら、村へやって来た。もう夕方になったので、どっかへ泊めてもろうと、どこへ頼んでもとめ手がないてんがな。ざとんぼはあんまり汚いなりをしているんだが、泊め手がないがだと。

この村に貧乏だが心のよい爺さと婆さがいた。汚い寒げなざとんぼを気の毒に思うて、「おらちはなんもないが、とまるがいい」と言うて泊めてくれた。ざとんぼは喜んで泊ったてや。

次の朝げ、まゝまが出来たので「ざとんぼ、まゝまにしよう」と言うて起すども、返事もないし、起きてもこないてんがな。ふしぎに思って、布団をまくったら。ざとんぼは居なくて、布団にいっぱい金があるてんがな。そこで、爺さと婆さは喜んで、あのざとんぼは福の神であったかと、すぐ銭勘定したども晩方になって数えられんてんがな。

そうして隣りのよくったまの婆さが火を貰いに来て、訳をきいて帰って行った。隣の爺さは、ざとんぼのくるのを待っているとこへ、ペンコペンコを弾いて来た。ざとんぼが、

泊めてくれとも言わんのに、やれもか泊れ泊れと言うて泊らしたてんがな。そうして寝るとも言わんのに早う寝れと言うて寝したてんがな。

次の朝げになると、まだまんまが出来ん中に、まんまだと言うて、ざとんぼを起したてんがな。やっぱし返事もないし、起きても来ないので、これは銭がいっぱいあると思うてふとんをまくってみたらば、きたないあっぱ（糞）ばっかだったてんがな。いちがぶらんとさがった。

目っこ猿

昔、あったてんがな。或る山に目っこの夫婦猿がすんでいたてんがな。生れる子供も、どれもこれも、みんな目っこ猿だてんがな。

或る日、よその山から二つ目を持った当り前の猿が、この山へ遊びに来たてんがな。すると、この山の目っこ猿が、二つ目の猿を見て、

「目が二つある片わ猿だ。」

と、馬鹿にしてはやしたてんがな。

二つ目の猿は、あんまりキャッキャッキャッと悪口を言われるので、自分はほんとうに片わ猿

かと思うと、せつなくなって、そんならば、この山の目っこ猿のようになりたくなって、山の岩角にぶつかって、とうとう目をつぶして、目っこ猿になってしもたてんがな。いちがぶらんとさがった。

つぶ太郎

昔、あったてんがな。或る村に子持たずの爺さと婆さがあったてんがな。子供がほしくてどうしようもないんだが、村の鎮守様からさずけて貰うとお願することになった。「どうか子供をさずけてくんなんしょ。つぶ（たにし）の子供でもいい。」と毎晩お参りに行ってはお願いしていたてんがな。

或る晩、いつものお参りをしての帰り道、田んぼのはたを通りかかると、赤っ子の泣き声がするので、いよいよ本願が達して神様が赤っ子をさづけてくんなした、これはありがたやと思うて近ずいて見たらば、いとしげのつぶの男の子だったてんがな。

爺さと婆さは大喜びで、この子はつぶの男の子だんが、つぶ太郎と名前をつけて、大事にして育てたてんがな。つぶ太郎は利口な子供だが、いつまで立ってもチンコだてんがな

或る日、つぶ太郎は、爺さと婆さに、「一つ頼みがあるから聞いてくれ。実は京の町へ

俺を修行にやってもらいたい。」と頼んだ。爺さと婆さは、「そうか、そうか、なじょも行ってくるがいい。体によう気をつけてな。」と喜んで許してくれた。

つぶ太郎は、ころころと出掛けて、村端れの一本橋のどこへさしかかって、一本橋を渡りそこねて、川の中へ落ちてしもた。近くにいた雑魚取りの網に引っかかって、助けてもらって、またころころと出かけた。

それから京の町へついたてんがな。はて、どっか良い家へ奉公したいもんだがと、そこらを探して歩いた。あるいい家が見つかったので、そこの入口で「御免なんしょ」と言うたてんがな。そこの家の衆が、「ハイ」と出て来たが、誰もいないのでまた引っ込んでしもた。また「御免なんしょ」が聞えるので出て見るども、誰もいないので首をかしげていたてんがな。そこで、つぶ太郎が「ここにいる、ここにいる」と言うたんだが、声のする方を見たら、足駄の歯の下に小さい子供がいるてんがな。「何だ、お前か、何の用だ」ときいた。「俺を若い衆につかうてくんなんしょ。なりはチンコでもよく働きます。庭掃きでも、水汲みでも、火たきでも、何でも嫌がらずに働きます」と、つぶ太郎が頼んだ。そこで旦那様から、「ようし面白い子だから、火たきにつかってやろう。」と言われた。

つぶ太郎は、火たきの名人で、まことによく働くので喜ばれた。その上、夜は夜で遅くまで勉強していた。こうしてやがて何年か立ってしもた。

或る晩のこと。そこの家のお嬢さんが便所に行くとて起きたら、つぶ太郎の部屋から、燈が見えたので覗いたら、つぶ太郎が一生けんめいに勉強しているてんがな。お嬢さんはつぶ太郎が見上げた男だと感心して大好きになった。

その中にお嬢さんが、あんばいが悪うなってきたてんがな。家中大さわぎして、いしゃに見せるやら、かんびょうするやらしたども、いっこう、なおらんてんがな。それでハッケミをたのんで見てもらったてんがな。ハッケミは、「このお嬢さんは、嫁にいきたくなったのだ」と言ったてんがな。家の人は「お前は誰のとこへ嫁に行きたいのか」ときいたてや。「ハイ、つぶたろうのとこへ嫁に行きたい」と言ったてや。つぶ太郎にきくと「なじょうも、もらいましょう」さ、喜んで、おじょうさんを嫁にもらったてや。そして二人で、国へかえることになったてや。

村が近づいて、村端れの一本橋のとこに来たてや。一本橋を渡るとて、つぶ太郎が川の中に落ちたてや。お嬢さんは困って泣いたてや。運よく、ざっことりのあみにたすけられたてや。

やがて「今、きたれ」と言って、家へかえってきたてや。つぶ太郎が、いい嫁をつれてきたので、ジサとバサは大喜びで、せいふろを立ったてや。つぶ太郎はお湯に入ったてんがな。ふろから上る時に、「コウコウ二本をくれ」と言ったてんがな。そして、そのコウ

コウを両足につけたら、つぶ太郎はあたり前のいゝ男になったてや。つぶ太郎はでっこい褌をかしてくれ、しまのきもんをかしてくれと言ったてや。そしてりっぱないゝ男になったてんがな、いちやボッコリ。

三人兄弟

昔、あったてんがな。あるところに、三人の兄弟が江戸へ働きに行って、金をためて三年の後に、国へ帰ることになったたてんがな。

やがて三年立ったてんがな。そして三人兄弟は、江戸から帰ってきたてんがな。

「三人で、村の庄屋へあいさつに行ったてんがな。江戸で菓子屋をした兄も、反物屋をしていたオジも、みやげをいっぱい、だんなさまにやったてんがな。そうすると、だんなさまが「その次のオジのみやげはどうした」と言ったてんがな。オジは「おら、江戸でスリをしていたので、何も土産はない」と言ったてんがな。するとだんなさまは、「そうかい晩におれは千両箱を枕にしてねるから、お前が取ったら、千両そっくりくれる。」と言ったてんがな。

オジは家へかえって、バサマに、ケエモチを十二つくってくらっしゃい」と言ったてんがな。それから、「ナスのみそづけ一きれくらっしゃい」と言ったてんがな。

さて、いよいよ晩になったてんがな。オジは、けえもち十二、なすのみそづけ一きれ、さしなわ一本をもって、おやさまの家にしのびこんでいったてんがな。
おやさまの家には、わかしゅが十二人いて、みんな昼間のつかれで、一間でぐっすりねむっていたてんがな。オジは、眠っている十二人の若い衆の褌を、さしなわで、お互いにしばりつけたてんがな。それから、その尻にけえもちを一つづつつけたてんがな。それから、だんなさまのいる奥の部屋にしのびこんでいったてんがな。千両箱を枕にしてだんなさまは眠っていられるてんがな。なすのみそづけの汁をしぼって、だんなさまの耳の穴の中に入れたてんがな。だんなさまは耳がかいような気がして、頭を上げたすきに、枕の千両箱を取ってしまったてんがな。
だんなさまは、ようやく目がさめて、「それ、大変だ、千両箱とられた。みんた、起きれ、起きれ」と、大声でわめいたてんがな。
その声に若い衆も、目がさめたてんがな。ところが、褌のところを縄でしばってあるしけつのところにアッパのようなものがあるので、動けないやら、きったないやらで、大騒ぎだてんがな。お前がアッパたれた、いや俺でない、などと、さわぎ合っているすきに、オジは、まんまと千両箱をかついでにげてしもたてんがな。いきはポーンとさがった。

㋑ 猿　聟　入

昔、あったてんがなあ、あるところにジサとバサがいた。バサは先に死んでしもうたが娘が三人いた。

夏の暑い日に山畠の粟の草を、ジサが取っていた。暑くて困るので、ふと言った。
「あ、暑い。誰かこの草を取ってくれる者がないか。さうせば、オラの娘三人の中、一人を嫁にくれるがなあ」

猿がきこえつけて、「ジサマ　ジサマ　お前今、何を言うた」と言った。
「オラは何んにも言わない」
「いや、言うた　言うた」
「いや　言わねえ」
「ジサマ、そんげにかくさんで言うたがよい。」
「それでは言うが、あんまり暑いので、この草を誰かとってくれれば、娘三人の中、誰か一人を嫁にくれると言うた」
「そいだば、オラがとってやろう」と言って草を取り始めた。指が長いので、ジョウサな

く取って、すっかりきれいになった。
草を取り終ると、猿は、「いつ嫁につれてくるか、明後日かな——必ず来てくだされ。ゴッツオをして待っている」と言った。ジサは「それや、うそは言わん」と答えた。ジサはやがて山からもどって来た。
家へ帰ってくると、ジサは、はて、困ったことだ、どうしようか」と、うなって寝ていた。
一番娘が「湯でも茶でもやろうかい」と言った。ジサマは「いや、湯も茶もいらぬ、オラの言うことをきいてくれ」「お前のことなら何でもきく」「そいだば、山の猿のとこへ嫁に行ってくれ」「いやなこと　いやなこと、猿のとこへ誰がいくもんか、ほんにロクなジサマでない」
ジサマは又、ウンウンうなつて寝ていた。二番のオバッコがきた。
「ジサマ　なじょらい、ごうぎ　なんぎいげだが、ももうか、はたこうかい」
「いや、なにして貰うこともいらぬ。オラの言うことをきいてくれや」
「あい　何んでも」
「裏の山の猿のとこへ嫁に行ってくれや」
「いやだ。他のことならば言うこともきくが。何だってあんな猿のところへなぞ。この糞

爺が」と逃げた。
又、うなってねていた。末のオトッコが来た。
「何にか心配事でもあるかい。お湯でも沸かそうかい」
「何んにもいらぬ。オラの言うこときいてくれ」
と、わけを話した。
「さうかい。その位の心配だけばオラがいごういし」
ジサは早速起き出して、嫁の支度に取りかかった。
娘をつれて猿のとこへ出かけた。
「さるろん、うちらかい」
「あ、待っていた　待っていた」
「嫁を連れてきたよ」
猿は喜んで、栗飯をしたり、ぜんまい煮をしたり、大変御馳走して、もてなした。
ジサマは、嫁をおいて、家へ帰って、それから、その年、何事も起らず、日がすぎた。
やがてドテに草餅の青い芽が出る頃になった。
「里のジサマに、この青い餅草で、草餅をついて食わしたら、ナジョに喜ばれるだろう。」
と嫁が言った。

「そいだば、モチクサ摘んで、餅をついてやればよい」
娘「そうかい、そうしてもらうかな」
娘「それにしても、何んにつめたらよいか」
猿「べんとうがよかろう」
娘「ヂサマはキンギョジサで、べんとうくさいといやがってくわん」
猿「鍋にいれたら」
娘「鍋くっさいと言うし」
猿「どうすればいい」
娘「お前がウスをぶて、うしろから、オラがつきつきいくのが、いっちうまい」
そこで、猿がウスをぶて、娘が後からトントンつきつき山道を通った。堤のはたに桜がきれいに咲いていた。
娘「あの枝、一枝、ジサマへ持っていったら喜ばれる」と言った。
猿が、オポショッテこうと思って、ぶていたウスを下そうとしたら、
娘「モチがベト臭くなるから、下すな。ウスをブテ上ってくれ。」
仕方がないて、猿はウスをぶて、だんだん上の方を上っていった。
「この枝で、なじだ」

「もっと天上」
「この枝か」
「もっと天上」
「この枝か」と、天上の枝をオッポショロうとしたら、ウスがくると廻って、猿は池の中へ、ドボット落ちて、沈んでなかなか出ない。
やがて、ポイと浮き上って
　猿の命は惜しくはないが、
　娘の泣くのが気の毒だ」と言ったかと思うと又、沈んで、それっきり、浮んでこなかった。娘は家へかえって、ことの次第を話した。
娘は親の犠牲も、猿への義理も立つので、これから一生安楽にくらした。
これでは　イキハボッコリ

女郎とあまんじゃく　（一）

　昔、あったけんがな。じさと、ばさが、あったてや。じさは、山へ「かやかり」にいった。ばさは、川へ洗濯に行った。そうしたれば上の方から、香箱が流れて来た。

「みのある香箱こっちへ来い。みのないからの香箱はあっちへいげ。」みのある香箱が流れて来た。ふたをあけてみたれば、いとしげの女郎がはいっていたてや。そうして「お前はこんげの箱の中に入って流れて来たのだよ。」といったれば、女郎は、「山のかん様が『お前はこの箱の中に入って里の方へ流れていげ、そうして、止まった所の人の子になれ』というて流されたのだ。」と言った。

「そうか、それは、いいあんばいだ。俺も、どうせ子供がないのだから、おらっちの子になってくれ。」と言った。その女郎ははたおりが上手で、まいんちはた織るてや。そうして仕事はいっぱいするが、飯ちっとさくわんないだんが、「お前は、何いっち好きのだ。」「おれは、山で育ったので山芋のとこがすきだ。」そこで、じさとばさが、「それじゃとこを掘りにいぐから、お前は留守をしていれ。隣のあまんじゃくが来たっても、よせてはならんぞ、あれは、ごうたれだすけ。」

隣のあまんじゃくは、じさ、ばさが出ていぐのをみていて、

「女郎、遊びにいごうや。」「おらは、はたおらんばならん。」「そいだば、俺を、ちょっとよせないか。」「おらちのしょは、んなのようなな、よくなしを、よせんなどいうがら。」「それでは、ほんの少し戸をあけてくれ。」

「やだ」

「つめの入るほど、あけてくんないか。そのくらいのことは、できるだろう」
そうすると、女郎は、錠をはずして、つめの入るだけ戸をあけたてや。そこへ、つめをつっこんで、ガラガラとあけて、中へ入ったてや。そうして、釜の中へ水を入れて、どんどんと火をたき出したてや。
「こらこら、あまんじゃく、火なんかたくなや」
「いや、お前の顔を洗ってやるのだ。」
「いや、俺はそんげんこと、してもらわんでもよい。」
それでも聞かんで、よ(湯)をわかして、女郎を押えて、釜の中へつきこんだてや。
女郎は、死んでしもたてや。そうして女郎のきもんをはぎとって、女郎を「かます」の中へつめこんで、裏の杉の木に、ぶらさげたてや。そうして女郎のきもんをきて、はたをおっていたてや。はたおりなんか、知らんがんだが、
「きいくけやれ、どんがった、かちゃん」
と、おっていたてや。
そこで、じさ、ばさは、
「あんな、はたおりの上手な子が、どうしてこんな音をさせているんだろ。」それから夜になるとどごを煮てくわせた。どごは、にがいんだが、あまんじゃくは、食うことが、で

きないので、くたふりをして、ふところの中へ、んな、おとしてしもた。夜が明けるとカラスが一羽飛んできて

「ジサのあほう、バサのあほう、あほう、あほう。」

と言うて、たっていってしもたてや。じさは大変おこっらいた。そこへ今度は、とんびが来て、

「裏の杉ん木に、女郎がピンョロヨ。」

そこで、じさが、裏の杉の木を見たら、大きな「カマス」が下がっていた。はい上って、その「カマス」を下ろしてみたれば、やけどっぴをして、見られねいような様をして、女郎が死んでいたてや。

そうして、たまげて、ばさと、そうだんして、はたをおっている、あまんじゃくを、うしろから、まさかりで、たゝき殺したてや。いきがポーンとさがった。

じゃろうとあまんじゃく（二）

昔、あったつあ。爺さは山へかや刈りに、婆さは川へ洗濯に行った。そうしたれば、上の方から香箱が流れて来たつあ。婆さは、

「実のある香箱はこっちへこい」
「実のない香箱はあっちへいげ」
と言うたらば、実のある香箱は笑い笑い、こっちへ来たし、実のない香箱は泣き泣き、あっちへいってしもた。

婆さが、実のある香箱を拾うたら、中からいとしげの女郎が、はたを織っていて、香箱から出て来た。じゃろうという名をつけ、爺さと婆さが可愛がっていた。じゃろうは山のところ（山芋）が大好きなので、或る日、爺さと婆さが山へとりにいぐことになったそうしてじゃろうに言うた。
「留守になるが人が来ても入れるな。隣のあまんじゃくがくるが、決して家の中に入れるな」

じゃろうは一人で留守居してチャンカラカ、チャンカラカ、とはたを織っていた。
そこへ隣のあまんじゃくが「じゃろう。遊びに来た、寄してくれや」と言うて来た。
じゃろうは「いやだ」と言うた。あまんじゃくは「針の入るほど戸をあけてくれ」と言うたども戸をあけなかった。こんどは「指の入るほどあけてくれ。」と言うたので、指の入るほど位ならよかろうと戸をあけてくれた。そうするとあまんじゃくは、ガラガラと戸をあけて、中へ入ってしもた。あまんじゃくは釜でお湯をわかして、その釜ん中へ、じゃろ

うをつっこんで殺してしもた。そうして菰に包んで裏の柿の木にぶらさげた。じやろうのまねして、はたを織っていた。

爺さ婆さが、山から帰って来たが、いつものじやろうと変っているので、不思議に思うていた。そうしたれば裏の柿ん木に、とんびが飛んで来て、

裏の柿ん木に
じやろうが、ピーン、ヨロロロ」

と鳴いている。ふしんに思うて、裏へ行ってみたれば、柿ん木に、菰がぶらさがっていたので、おろしてみたれば、じやろうが死んでいたつあ。それで、爺さはおこって、あまんじやくを殺したと。いちがぶらんとさがった。

猿と爺さ

昔、あったてんがなあ。あるところにジサとバサがあった。ジサは山へシバ刈りに、バサは川へ洗濯に行った。

ジサが山に行くと、猿の子供が、珍しがって、ジサのめぐらにモヤモヤ集って来た。

「ジサがいたや、ジサがいたや」と言い合った。すると、ジサは「ジサずらあるんだな。

オレは神様だぞ。なら、山の下までオラをつれて行けば、極楽浄土へ参らせる」と言った。猿の子供は「かつねて行こう」とて、ジサをデングルマにのせて歩き出した。やがて山を下りて里に出た。猿の子供は、「極楽とはどこらだ」ときいたら、その時ジサが屁をブーとこいた。

「今の音は何だ」ときいたら、「あれは、極楽の太鼓の音だ」とジサが言った。猿の子供らは「クサイ、クサイ」と言った。「それは、ごくらくのお香のにおいだ」とジサが言った。やがて川にさしかかった。もう一度屁をここうと思って、ギバツタラ、屁どころかアッパをたれてしまった。

猿の子供らもあきれて、「このウソコキジサめ」と、ジサを川の中に投げこんだ。ジサは流れ流れて、バサの洗濯しているところまで流れて来た。いきがぼっこり。

三枚の札

昔、あったてんがなあ。あるところに和尚さんと小僧が住んでいた。小僧は山へ仏様にあげる花をほしよりにいった。もっといいが、いいが、きれいな花をさがして、山のいりいりと歩いていく中に、もう日が暮れかかってきた。これは大変だと気をもんで、山の

イリから里へ出ようとしたが、いくら歩いても里へは出ない。その中に日はトップリ暮れて、あたりはまっ暗になった。はて、どうしたものかと困っていると、山の沢たまに、火がテカン、テカンと見えたので、それをたよっていった。一軒家にバサがいた。道に迷って困ったからとめてくれ、とたのんだ。

バサは、とまろばとまれと言った。バサの顔は見るからにおっかなげであった。夕飯に、ヨヅケをしてくれた。やがてねる時となった。するとバサは、オラトコは、夜具がないから、ねる時はオラにだかれて、ねんければならんが、それでもよいか、と言った。小僧は仕方がないので、それでもよいと言った。だかれて寝てウトウトすると、どうも変なので目をさますと、バサが頭をベラベラなめている。変だなあ、気味が悪いなあと思い乍ら、トロトロすると、又、バサが頭をなめる。これはおおごとだ。マゴマゴしていると、この鬼ババに喰われてしまう。何とでもして逃げだすに限る。どうしたら逃げられるかといろいろ思案した。

そこで、オラ、アッパンジョへいきたい、アッパンジョへやってくれ、とたのんだ。

バサは「おらの手の中にこけ」と言うて、手を出した。小僧は、「モッタイナイ、どうしてお前の手の中になんぞ、こかれよう」と言った。バサは「いや、こけ」と言った。小僧は、「いや、だめだ　アッパンジョへやってくれ」と言った。あんまり小僧が言うので、

アッパンジョにやることにした。小僧の腰に、縄をつけて、バサが、その縄をにぎってい る。小僧は、セッチンに入って、センチンの神様に頼んだ。

セッチンの神様、どうか逃がしてくりやれ。オラはまごまごしていると、この鬼ババに食べられてしまう。オラはこの縄をきって、逃げるから、もし、オニババが、オラを呼んだらば、オラの代りに、返事してくりやれ。どうかお願します。」と頼んだ。

セッチンの神様は、「よしよし、承知した。それから、この札をお前にくれる。何かの時につかえ」と言って、砂山になれ、大火事になれ、大水になれ、と言う三枚の札をくれた

小僧は、それをもらって、ゴンゴンと山道を逃げ出した。縄をほどいて、アッパンジョの柱につけた。

やがて、鬼ババは、「小僧々々、よいか」とさいそくした。セッチンの神様が「まだようない」と返事した。

「小僧々々、よいか」「まだ、ようない」

「小僧々々、よいか」「まだ、ようない」

「えいっ、意気地もない、この奴め」と、力まかせに、縄をひっぱった。便所の柱がぬけて、バサの頭に、ゴキンとぶつかった。バサはマッカになっておこり、「小僧め、さては逃げやがった。ようし、かんべんならん」とおいかけた。オニババの足は早く小僧の三足

は二足に、やがてババの姿が、後にチラチラ見えるようになった。いよいよ近ずいて、「この小僧め、ンノ、逃げやがって、こんちくしょう」と大声でさけび乍ら、手を出して迫ってくる。

小僧は、ここぞとばかりに、札の一枚を、「砂山になーれ」と後を見ながら投げた。するとたちまち、バサの前に見る見る大砂山が出来た。バサは物ともせず、大砂山をドンドンと走ってボッカケてくる。

又、つづきそうなので、今度はは大火事になーれ」と言って、火事の札をなげた。すると、山の中がクワックワッと大火事になった。バサは、その火の中をくぐっと、ドンドンと追いかけてくる。（ますます怒って）

やがて又つづきそうになったので、大水になーれと、大水の札を投げた。（後をむいて）見る見る大川ができて、バサの走ってくるところをじゃまする。バサはその大川を渡って追いかけてくるてんがな。

その中に、夜も白々と明けはじめ、小僧はようやく里にかけつけた。大川をこえてバサは尚もぼっかけてくる。お寺に辿りついて、わけを話して、かくしてくれと頼んだ。仏様の本尊様の下にかくしてくれた。やがてオニババが寺にやってきた。「小僧はここに来た筈だがどこへ行った」「いや、こない」「いや、来た。ンダバ探す」と、そこらをたずね

まわったが見つからない。さすがに本堂には入らなかった。まものなので、本尊様をおそれたにちがいない。内にはいないので、やがて外に出て探し廻った。

外の井戸の中を覗くと、自分の顔が映った。オニババは、そら、こんずべ、ここにいたかと。井戸の中に飛び込んだ。それっと言うので、石ころやベトコロを井戸に投げつけて、オニババを井戸の中に埋めてしまったてんがなあ。それで、いきがぽっこり。

いんてんだらりかんちきりん

昔、あったてんがな。江戸に若い男が住んでいた。嫁をもらう年頃であった。嫁は越後人に限るとて、江戸にくらしている越後人に、仲人になってもらった。

さて、仲人は、嫁さんが見つかったので、明日連れてくることになった。ムコは越後言葉がわからないし、ヨメは江戸言葉がわからないので、困るとムコが言った。仲人は、案ずることはない、ワシが両方の言葉がわかるから、ワシがきかせると言った。

やがて嫁を連れてくる日――

その朝、大風が吹いた。嫁が来て挨拶することになった。何と言おうかと考えた末に、

正風ハゲシキ　ショウセキ　ガンニウス

と言った。

これをきいたムコはわからんので、仲人にきいた。今朝の風は、あんまりはげしいので、眼の中に砂や石の入る位であった。という意味。むこは、これをきいて、そうか、そうか今度は、俺が挨拶する番だ。向うが風の挨拶なら、こっちも一つ

インテンダラリ、カンチキリン、と言った。嫁はわからんので仲人にきいた。キンタマは夏の炎天には、暑いのでダラリとしているが、冬の寒の中は、寒いので固くしまっている、との意なので、大笑となった。

夫婦となり一生安楽に暮したということである。いちやボッコリ。

36

食わずカカ

昔、あったてんがな。慾ったまの深い男があって、まんま食わんで働らくカカがほしがっていた。或る時、女が来て、「おらはまんま食わんでよう働くから、お前の嫁にしてくんろ。」と言うたんだが、「そうか嫁になるがいい。」と言うて、その女を嫁にしたてや

このカカはいつも、まんまを食わんで働いていたが、トッツァが山仕事に行くと、大釜で米をいっぱいことたいて、味噌玉のようなヤキメシをにぎって髪をといて頭の大口も出

して、

「目食え、鼻食え、口食え、頭食え」とそこら中に食わしているてんがな。そうして頭の中の大口へ、まんまをどんどんと投げ込むがんだと。トッツアが帰ってくると知らん顔して、ちっともまんまを食わんがんだてや。

となりの家のもんが、カカの留守事をこっそりトッツアにきかしたので、或る日、山へ行ったふりして、かくれて見ていると、また米をどっさり大釜でたいて、頭の大口に食わしていた。夕方になると、トッツアは帰ってきたふりをして、すぐと、「今日限りお前に暇をやるから出ていげ」と言うたと。カカは、

「出ていぐすけ、何かくれてくれ。」と言うた。

「何がほしいがら」

「桶一つもらいたい」

そこででっこい桶を一つ呉れたら、トッツアに、「お前ここにちょっくら入ってくれ」と言うんだんが入ったら、カカはすぐ負てとび出したてんがな。山の奥へどんどんとかけ出していぐ道中で、トッツアは木の枝につかまって桶の中から逃げ出した。カカはそれを知らんでいり山へ走っていったが、やがて引き返してくるてんがな。トッツアは木の下のよもぎとしょうぶのやぶつへしゃがんで、かくれていた。カカは戻ってそこらを探すども

よもぎとしようぶのおかげで、見つからんで助かった。それで五月五日の節句の日に、よもぎとしようぶを、そういう訳でつかうがんだてや。いきがぶらんとさがった。

お客とするめ

昔、あったてや。　きれいずきの客が二人で或る家にとまったとこてんが、そこの家ではかいもちをしていられるてや。ぶていた赤っ子がギヤギヤと泣いているので、よいよいと言うている中に、赤っ子がアッパをたれた。それを知らんで、よいよいと赤っ子のけつを、パチヤパチヤたたいて、その手でかいもちを丸めているがんだと。二人はこれを見て、これは汚くてとても食われん、外へ行って何か食てこうと家を出たてや。

家の前にするめが二、三枚かけてあったので二人はそれを食てしもた。朝げ、子供が、「便所へ行っていいか」と言うているてや。「おお」と親がついていくと、いつも子供の尻穴を引っこましてくれる大事なするめがないので、親は、「はて、するめがないが、猫でもとったかな。けつの尻穴ひっこませるがだ。」と言うたてや。二人はこれをきいて、汚いやら、なさけないやらで困ってしもたてや。いきがポーンとさがった。

八石豆

昔、あったてや。或るどこに婆さと嫁があった。婆さはなじょねかきんぎょな婆さで、いつも嫁をいじめているてんがな。それでも嫁は婆さの言うことをきいていたてや。或る日、豆を煎ったのを一升嫁に持たして、豆の種をまいてこいと言うたてや。嫁がまいたらそん中からたった一粒だけ芽出したてや。嫁は一生けんめいで豆の草をとって、豆がいっぱいなってくれとたのんでいたと。そうしたれば豆がでっこうなって、ありやと、八石も豆がなって、嫁はごってい喜んだてや。婆さも喜んで、こんだはいい婆さになって、今までのことはよくあいまって、そうして嫁と仲よう暮したとの。いちやぽっこり。

35 鏡

昔、あったげろ。父親に早や死に別れたあんにゃがあった。あんにゃが町へ行ったれば店屋の先きに手前の顔が映っているてや。あんにゃは、「おゝ、これはおらのつあつあがいらっる。あゝ、久しぶりだ。」と言うて、その鏡を買うて来た。

家へ帰って来て、こっそり長持ちの中に入れておいた。そうして毎日、まんまを運んではつあつあに会うていた。かかは、毎日何しに二かやに行くのかと、ふしぎに思うていた。それでとっつあの留守に、二かやにこっそり上って、長持ちの蓋をとってみたれば、いとしげな女がいるてや。さては、これでわかった。おらにかくしてめかけを長持ちの中に入れておいて、毎日まんまを運んでいらつる。この糞とっつあめ、と怒ってプリプリしていた。

その中にとっつあが帰って来たので、「お前はかくし女を長持ちの中に入れておくがどういうがんだ」と言うた。とっつあは、「そうでない。あれは死んだつあつあを買うて来たのだ」と言うている中に、こっていの夫婦げんかになった。

そこへ村のあんじょ様が来られて、「お前方は、何そう喧嘩しているがんだ。おらが一つ裁判してやるが」と言はした。そこでとっつあはこうこういう訳だ、かかはこうこういう訳だ、というたれば、あんじょ様は、「よし、わかった。それだばおらが、死んだとっつあだか、かくし女だか、見届けてやる。」と言うて、二かやに上った。長持ちの蓋をあけて見たれば、髪をすった坊主の女がいるてや。そこで大急ぎで下へ降りて来て、「けんかは止めたがいい。つあつあはいないし、かくし女は頭すって坊主になっているすけ、安心したがいい」と言うた。いきがぶらんとさがった。

39 猿とたこ

昔、あったてや。

或る時、龍宮の乙姫様が病気になったてや。医者に診てもろたれば、猿の生きぎもを飲むと治るということだ。そこで誰かこの猿の生きぎもを取りに行くものはないか、ということになったれば、たこが「俺が行ってくる」とて勇んで出かけたてや。

たこが海端に来て見たれば、一匹の猿が遊んでいるてや。

「おい、猿どん、猿どん、お前は龍宮へ遊びに行って見る気はないか」

「浦島太郎は亀に乗って行ったということだが、俺も行ってみたいが、泳ぐことも知らないし、行く訳にや参らん」

「そいだば、俺がつれて行ってやろか。俺の頭にしっかりつかまっていれ」

そこで猿はたこの頭につかまって、海の中へ泳ぎ出たが、沖へくると、たこが沈んでしもた。猿はたんまげて、

「おい、たこどん、たこどん、俺をどうするつもりだい」

「何、どうするもこうするもない。いまに鋸　がやってきて、お前の腹をかっつやばいて

、お前の生きぎもを取るのだ。」
「生きぎもを何にするのだ」
「龍宮の乙姫様が病気で、生きぎもを食べると治るのだ。」
「そうかい。それは困ったことになったぞ。その生きぎもを、海ばたの栗の木に引っかけたまんま忘れて来た。天気が悪うなって来たが、雨にぬれると困る。」
「ほんとうか」
「ほんとうだとも。生きぎもが入用なら俺を連れて取りに行ってくれ」
「そこで、たこはまた猿をのせて、もとの海ばたへ戻って来たてや。
「おい、たこどん、お前は海の中で泳げるが、おかは歩けないだろう。俺にばつれ。」
猿はたこをぶて、栗の木のとこでおろして、スルスルと木に登って、いさいさと木をゆすぶった。そうしたれば、栗のいがが、落ちて、たこにぶつかって痛くてたまらんてや。
たこは苦しがって、
「猿どん、猿どん、助けてくれ」と言うたれば、猿は、
「栗のいがでお前を殺してくれようと思うたが、命だけはかんべんしてやる。」と言うてたこを海の中に、ほん投げてしもたてや。いきがポーンとさがった。

三人兄弟

昔、あったてや。

親が死んで、太郎、次郎、三郎の子供が三人あって

「こんげの田舎で百姓をしているより、都へ出て、出世くらべをしようではないか。しんしようを売りとばして、お寺へは少しお金をあげて、永代経をあげてということにしてしまえば、最早、この田舎に未練はない。思うぞんぶんに出世をしよう。」と言って、出かけて行ったてや。行ったてやば、道が三本あったてや。

「どの道を行ったらよかろうな」言って兄は、

「いっち上を行ってみよう。」

二番目の兄は

「その中をいこう。」

三番目の兄は、

「いち番、下をいごう。」と言う事になった。

ところが一番上の道が都へ出る道で、なんなく都へついたてや。そうして、いいお屋敷へ奉公したてや。

ところが、男が好いのに、できるので、家の主人がみこんで、学問させたり、剣術を教えたりして、家の聟にしてしもた。

二番目のおじは、いっくら行っても、いっくら行っても、良い道へは出ないで、腹が減ったし、疲れて、倒れていたてや。

そこへガヤガヤと、荒くれ男共が来て、

「おー　かわいそうだ。おらについて来い。めしぐらいくわしてやる」と、連れて行った

それは、泥棒共であった。頭が良いし、できるので、忽ち大親分になったてや。

そうして「兄達はどうしているだろー。俺ぐらい、ぜいたくに暮らしている者ないだろ」と、思うていた。

三郎は、下の道を行ったところが、山又山で、やっと平地に着いたてや。

そこに、おやさまがあったので、

「どうか、今夜とめてくれ」と言うて、とめてもらったてや。家の主人は、あまりえゝ男なので、「お前はどこへ行ぐのだ」ときいたけば、

「いや、どこというあてもないが、俺は、出世したいのだ」と言った。そこで主人は、

「おら家にいれば、学問をおしいてやる。」

と、言うので、まじめに働いていた。

とうとう主人に見こまれて、その家の聟にしられた。

或る時、二郎は、

「あの里の大臣のところに行って、うんと盗ってやろ。」と言って、おしかけて来た。そうして土蔵の中から、宝物や金を沢山盗って帰って行った。そのうちに手がまわって泥棒共は、みんなつかまった。

それを調べた役人が、太郎であったてや。太郎は、何気なしに、泥棒を見おろしたところが、自分の弟であった。又物を盗られたのは又自分の弟であった。そこで主人が、顔を見合わせることになったが、法は曲げられないこんだんが、二郎はとうとう打首になった

太郎と三郎は、お互いに出世を喜んだが、

「あゝ二郎も、道をまちがわなかったら、こんなことにならなかったろう。」と言ってたてや。いきがポーンとさがった。

鶴と猿

あったげろ。猿が、兎とってくったところが、のどへ骨がつっ立ったてや。そうして、苦しんでいたてや。そこへ鶴が来たので、

「鶴どん、鶴どん、この骨を抜いてくれるとこの兎の肉を半分やるから、どうか、抜いでくれ。」そこで鶴は兎の肉を貰おうと思って、「おまい、大きな口をあけれ。」と言ったら、のどに、たたった骨が見えだして来た。

　鶴は長い口ばしをつっこんで、その骨を抜いでやったが、狼は、肉を少しもやらないでみんな自分ばかりで食べようとした。そうすると、鶴が、

「狼どん、私に約束したとおり、肉を、半分くんないか。」と言ったが、

「なにを、バカ言うな、おまいが、私の口の中へ口ばしを入れたとき、ぱっくりやったらお前も兎のように、俺に食べられてしもうたのだ、命だけは助けてやるから早く帰れ」

といいながら、兎の肉を食べていたら、罰があたって、又のどへ骨がつったったてや。

「鶴どん鶴どん、今度こそ本当にやるが、又抜いでくれ」

「いや　抜ぐとき、お前に頭からかじられると悪いから、抜いてやらない。あばよ。」

と言って、たって行ってしもうたてや。いきがぽーんとさがった。

ありへいの化けもん退治

おったげろ。村のそうれい場から、化けもんが出て、夕暮になると、子供をさらって行

って、困ったてや。

そこで、おやさまは、

「そのおばけを退治したものには、ほうびとして、金十一両をくっらる」という立札をたてたてや。

そこで、その村の有平という、ごうぎな男があったてや。

「それじゃ、俺が退治する」というので、大きなまさかりを腰にさして、夕方、行ったてや。それを人が見て、

「有平どん、こんなばけもんの出る、ぶっそうな日暮れに、どこへ行くがら。」と言った。

そのうちに、まっくらになったてや。

有平が、木の切り株に腰かけていると、誰かが、来る様うな音がしたてや。見ていると、そこへ隣の父ちゃがきたてや。

そうして、

「有平ろん〳〵お前のばさが死にそうだから来てくれ。」　そこで有平考えたてや。

「あの憶病なあの父っあが、ばけもんの出るこんな所へ来るきづかいはない。これは、必らず、ばけものだろう。」と思った。

「よし、俺は折角。来たこんだから、どんな事があっても、今夜は帰らぬ。お前よく看病

してくれ。」と言うて、帰したとや。
　そうしると、少したつと、又隣のトッツァが来たてや。
「有平ろん有平ろんばさが、死んだすけ、早く来てくれ。」
「どうせ死んだ！だから、かまわんでおいてくれ。」
　そうすると、又少したつと、隣の父っつあが来たてや。
「葬式をだすから、早く来てくれと。」
そこで、有平が大変ねこって、
「馬鹿やろ、俺が行かんのに、葬式がだせるか。」　少したつと、葬式の音がし始めた。
そこで、有平は、
「やろども、よくも俺をばかすとて、こんなことをしやがる」と言うて今度は、木の上にのぼって、その葬式を見ていた。
　そのうちに、葬式をだして、火をつけて、みんな帰ってしまった。
そのうちに火がわれて、中から大入道が出た。そうして、
「有平、俺が死んだがね、何故来ないや。有平！」と言って、四本柱のめぐらを歩いてあいた。そうして有平を見つけて、有平ののっている木にはい上り、有平の足を、しっかとおさえた。有平はその手をおさえて、一げきのもとに、その大入道の手をまさかりで切

りおとした。そうして
「きゃっ」
という声を聞くと共に、火は消え、大入道も消えてしもうた。
夜の明けるのを待ってみたら、大きな狸の手が落ちている。その血をたよっていったら大木のうろに、血の跡がついていたので、中をのぞいたら、大古狸が二匹いたのを、マサカリでぶち殺して、それを持って、おやさまへ行ったてや。
おやさまは非常に喜んで、約束通りの金を十一両もらったてや。
昔の金は、大した金だんだんが、有平は非常に楽にくらすことができたてや。いきが、ぽーんとさがった。

蛇の目玉

あったげろ。あるところに、よっぽど良い男の若もんがあったてや。
それが、いつも草刈にでるので、大へんびが、男の良いのをみとれて、「なんとかして嫁にいぎたい」と、思っていたてや。
ある時、女にばけて、その家を訪れた。そうして、

「今晩は泊めてくれ。」と言ったら、
「私はひとりものだが、それでもよかったら泊れ。」　そうしたところが、
「一人もんはどうしても、見廻しが悪いので、お前はまことに気の毒だ、私がみんな洗濯をしてあげる。ほころびもんもしてあげる。」といってから一日二日とたつ中に、
「どうか、私を嫁にしてくれ」と　頼んだ。そこで、その男は喜んで嫁にした。
一年たつと、身もちになって、子供が生れるようになった。
「子を生む時は、どうか見てくれるな。」
その中に子が生まれて、産ぶ声を高くあげたてや。男はよろこんで、
「子が生まれた」と言うて、こっそり部屋の中を見たれば、大へんびがわをかいて、その上にかわいいしい女の子をのせていた。見られて驚いた大へんびは、
「最早や、お前の所に嫁になっていることはできない、俺がいなくなって、この子が泣いたら、私の目玉を一つやるから、これをなめさせてくれ。そうしるうちに、この子が、立派に育って行くから。」と言うて、渡して行ってしまった。
そのことが殿様の耳にはいった。殿様は、
「そんなめずらしいものを、お上にあげる。」というて、とりあげてしまった。
そこで、その子が腹をへらして、火のつくように泣いたので、大へんびはたまげて、

それでは、と又もう一つぶの目玉をくれていった。そこで、とうとう蛇は盲になってしもた。そのことが、お上に知れて、又もや取りに来たけれども、あまり気の毒なので、とうとう許して行った。

それから、蛇は、盲なので、一年の年のたつのを、としやの鐘によって知ることになった。

いきがポーンとさがった。

魚売り

昔々あったてや。

あるところに、魚屋の小僧があったてや。魚があんまり売んねんだんが、山の方へ売りに行ったてや。そうしたれば、へんな家の中から、ばさが出て来て、「おー魚、買う買う。」というから、小僧が、ばさばさ、一っぽも買うがいかい。」「いやいや、その魚みんなおいていげ。」「お前一人で、こんげいっぱい、食えるかい。」「いや、おれは魚なんか大すきんがだ。」と言うて、生のさばを、二三本食べてしもた。そうして、ぜんかんじょうをいっこうにしないんだんが、「ばさばさ、かんじょうをしてくれ」と言うと、「そうか」と言って出て、椿の葉を五六枚取って、「ほら、ぜん」と言って出したので、「こればさ

これは椿の葉だ。」「そうか、どんげんのがんがほしいがだ。だして見れ。」そこで、魚屋の小僧は、さいふの中から、ぜんを出してみしたらそれをひったくってしもた。小僧はおこって、「このばばあめ」と云うと、「なに小僧、おれは山うばだ。頭からかんでしもうぞ。」小僧はそれを見て、たまげてにげ出した。しかし、魚は取られ、ぜんまで取られて、くやしくてならんので、「ばさの家でもつまづりこわしてくっれ。」と云うて、家にはい上って家をこわしはねた。ばばは、しらないで魚を煮て、はちを取りに行くところであった。小僧は、のうちだけ（すぐやねにしばってある竹）で、かぎをこしらって、その魚鍋をひきあげて、みんな取って、から鍋をかけておいた。おにばばは、「ゆだんしたこまに、よろびのかんさまにたべられてしもた。今度はもちをやこう。」そこでもちがやけると、おにばばは砂糖を取りに行った。そのすきに、小僧はさおで、そのもちをみんなさして、取ってしもた。おにばばは又「ゆだんしたこまに、いろりのかんさまにたべられてしもた。」こんどは、あまざけでもわかしてのもう、と、あまざけをわかすと、今度はこうこうを取りに行った。おにばばは、なにぎなしに、うしろを見ると、なべが天井にのぼっていぐ。見ると小僧がいたので「このどろぼう」と言って、とび上った。小僧はにげしなに、おにばばにあまざけ鍋をぶっかけて、にげてしもた。小僧ばいっしょうけんめいににげて、寺にとびこんだ。「おしょうさん、どうかたすけて下さい。おにばばが追うて来た」

と言うと、「又おにばば、そんないたずらをいているか、この押入れにかくっれ。」そこへおにばばがおっついて来て、

「おしょうさん、魚屋の小僧が、たしかに来たはずだが、早く出してくれ。」「あ、そうか、それでは井戸ばたへ水をのみに行った」。

おにばばは井戸ばたへ行って見ると、自分の影が井戸にうつった。もとより、あまざけ鍋をぶっかけられた目がかすんでるのだから、小僧だと思うて、井戸の中へとびこんだ。そこで、おしょうさんがふたをして、重りをしてしもた。おにばばは、井戸がわにつかまって、「おしょうさん、どうぞ助けて下さい。」おしょうさんは、「お前はどうせろくなことをしないがらんが、井戸の中に死んでしもた方がよかろ。」そこでおにばば、「おれを助けてくれると、おれいを百両くれる。」「いやいや、助けるわけにはいかん」「それでは五百両やる。」「まだまだ。」「それでは千両箱一つやる。」「こら、おにばば、うそをつくな。」「いやほんとだ。」「どこにおいたがだ。」「うちの神だなの下に、石のかどの中に入れて、しまっておいたんだ。」「いやいや、だしてやるわけにはいかん。」

そこで、「魚屋の小僧、おにばばは井戸の中で死んでしもたが、おにばばは千両箱一つおいたと言うから、行って見よう。」と、二人で行ったところが、あんのごとく、千両箱があった。そこで、おしょうさんは、人を苦しめてためた金だから、今度はこの金で、多く

の人を助けてやると言って、びんぼうもんにその金をくれてしもた。いきがぽーんとさけた。

四　ぐずとぐわちゃ

昔、あったてや。かるところに、かつかとぐずと、ぐわちゃの二人の子供があった。親の命日に、おしょうさんをよぶことになった。ぐずに、「お前、お寺様に使いに行って来い。」そうしると、ぐずは、お寺様に使いに行って、「おしょうさん、早くお経読みに来て下さい。」と言うと、奥の方で、「にあおん〳〵」と返事があったので、家へ帰って来た。「今行って来たれ。」「おしょうさんはどういわれたえ。」「にあおん〳〵といわした」「ばかやろう、それは、ねこというもんだ。」「それでは、ぐわちゃや、お前行って来い」そうすると、ぐわちゃが、「おしょうさん、お経読みに来てくんなんしょ。」と言うと、うらの方で、「わん、わん」という返事があったので、家へ帰って来た。「今行って来たれ。」「おしょうさんは、来られるか。」「おしょうさんは、わんわんといわれた。」「「ばかやろ、それや、いぬと言うもんだ。」「ぐず、お前は、よく使いをして来い。」そこでお寺へ行って、

「おしょうさん、お経読みに来てくんなさい。」ところが「ここけっこう」という返事があったので、家へ帰って来た。

「いまきたれ。」と言うと、

「どういわれた」

「けけけっこうといわれた」

「ばかやろ、それはにわとりだ。」そこで

「それじゃ、ぐわちゃ、お前、行って来い。よく使いをして来い。」ぐわちゃが行ったところが、「もう」と云う返事があったので家へ帰って来た。帰って来て、

「どういわれた」ときかれたので、

「もうーといわれた」

「もうーというのは、となりの牛だ。」

「こんだは、おれが行って来るから、ぐず、お前はかまの火をたけ。ぐわちゃ、お前はおつゆの火をたけ。」と云われて、火をたいていた。ところが、かまがにいたつと、ぐすぐすといいだしたので、「オイオイ」と返事した。いつまでめても、ぐすぐすと云うので、

「おいおいおいおい。」と返事をしていたども、あまり云うので、「いまいましい、ばかやろ」と言うて、ぐずはかまを庭へなげとばした。ぐわちゃは、おつゆがにいたつと、ぐ

わちゃぐわちゃぐわちゃぐわちゃと言うので「おい、おい」と返事をしていたが、きりがないので、おこって又、なべを庭へなげてしもた。そこへ、かっかが帰って来られて、「なら、なにそうけんかしているがだ。そこらじゅう、まんまだらけにしたり、おつゆだらけにしたりして、このばかやろども。」としかられた。

「いや、いくら返事しても、はてしがないがで、おこってなげたがだ。」

「ばかやろ、かまがにいたてば、ぐずぐずと云うのは、あたりまえだ。なべがにいたてばぐわちゃぐわちゃいうのがあたりまえだ。」と言われた。

そのうちに、おしょうさまがこられた。そこで、しかたなしに、おしょうさまに、あまざけでもわかしてやろと思うて、二階に作っておいたので、「さあ、ぐず、かめをおろすから、けつをしっかりおさえれ。ぐわちゃ、お前ははちをおさえれ、いいか、おろすぞ、おさえているか」。

「あ、しっかり、おさえている。」というので、かっかが手をはなすと、すとーんと、おって、かめがわれて、そこがだいなしになった。

「ばかやろども、どこにおさえていた。」

「ほら見たがいに、おらは、こんげにけつをしっかりおさえているねかし。」

「ほら、こんなに、はらをしっかりおさえているねかし。」

「ならがようなもんに、かもわんねえ、このばかやろう。」
いきがぽーんとさけた。

４ お釈迦様の葬式

昔、あたたてんがな。
おしゃかさまが死なれて、動物が、みんな葬礼に立つことになったてや。ところが、けらつつきは、あんまりしゃれこいて、かがみの前に立って、自分の姿に見とれていたために葬礼の間に合わなかった。そこで、おしゃかさまは、お前のような奴には、命のあるだけ一日に三匹の虫しかくれない。そこで、けらつつきは、それでも食いたらんので、昼間は一生懸命に木をつつきまわって、夜になると、くちばしがいたいので一晩中泣いていたてや。
すずめは、おはぐろつけて、おそくなったので、あまりあわてて、おしゃかさまのところへとびこんで、おしゃかさまの枕にけつまづいて、それから、歩くことができないで、一足とびに、ぴょんぴょんと、とぶようになり、おしゃかさまのそうしきには間に合ったので、稲の穂をくてもよいようになった。ねこは、その日、仲間げんかしていたので、おし

やかさやの葬式には、よせられず、げろうになったと。
いきがぽーんとさがった。

46 けんかする家

昔、あったてや。あるところに、けんかばっかりしている家があったてや。ある日、ばあばが出て、
「あ、お寺のけやきの木にからすが巣をくった。」と言うたてや。そうすると、嫁が、いつも、にくまれ口ばかりきいているので、からすとは承知しながら、
「ばさばさ、あれは、にわとりの巣だ」と言うと、ばさがおこって、
「にわとりが、木の上に巣をくうか。」
「くてるから、くてると言うのだ。」と言っていると、そこへ又、あにが出て、
「んー、おらかか、なかなかやるな。よし、おれも、とっぴなことを言うてやれ。」と思って、
「あれは馬の巣だ。」と言った。
そうして、三人して「馬だ」「にわとりだ」「からすだ」と言うて、けんかをしていた。

そこで、ばさが、「それじゃ、おしょうさんにきくか。」よし、それがよかろ」「あしたあさげききにいこう。」ということになった。そこで、ばさは、酒一升たがいて、「まあおしょうさん、おらうちのもの位、やぼをいうものはない。あのからすの巣を見て、にわとりだの、うまだのというているから、よくきかしてもらいたい。あしたききにくるから。」と言って帰った。

そこで又、嫁が、酒一升たがいて、

「おしょうさん、お前さんのけやきの上に、からすがすをくだども、いつもにくまれ口ばかりきいているばさなので、おれがにわとりの巣だと言うたすけ　あしたはどうか、にわとりの巣だと言うてくんなんしょ。」と言って帰った。

こんどは、あにが、又酒一升たがいて、

「おしょうさん、お前のけやきの木の上にからすが巣をかけたども、それで、おれは、馬の巣だと言うたから、馬の巣だと言うてくんなんしょ。」と言って帰った。

よくあさげ、三人して、おしょうさんの所に行った。そこで、ばさが、

「おしょうさん、あれは、からすでしょうな。」というと、「あゝ、からすだからすだ。」

ばさは、「それみれ、からすだことと。」

そこで嫁が、

「おしょうさん、あれはにわとりでしょ。」
「あゝ、にわとりだ、にわとりだ。」
よめは、「ほれ、みれ、にわとりだこと。」
そこで、こんどは主人が、
「おしょうさん、あれは馬の巣でしょう。」
「あゝ、うまだ、うまだ。」といった。
そこで、ばあさんがおこって、
「おしょうさん、お前さんは、きのう、からすだと言うて、馬と言えば馬、にわゝりといえばにわとり、いったい、どういうわけなのか、きかしてもたいたい。」と言うと、そこでおしょうさんは、
「あれは、巣をかけたばかりで中は、からだから、からすという。にわとりというのは、一羽でなく、二羽して巣をかけたのだから、にわとり。又、馬の巣というのは、巣をかけたばかりで、たまごをうまぬから、うまの巣というのだ。」といいました。
「そんなところへ、へりくつをつけて、しごともしないで、酒三升出して、そんばっかして、なんのとくがある。それよりも、みんながきもちよく、働いた方が、よっぽどました。けんかをすると、びんぼうするのだ。」といわれたてや。いきがぽーんとさけた。

り　化物と座頭

昔、あったてや。或る村の堂様に、毎晩、ばけもんが出ては、お詣りする人を困らしていたてや。

或る日、一人のざとんぼがペンコペンコと弾きながら、この村にやって来た。そうしたれば、子供がかたまってワイワイ言うているので、「なら、何があるや。」と聞いたてや。村の子供は「ここに村の堂様に出るばけもんを退治してくれという立札が出ているがらし」と言うたら、ざとんぼは、「よし、俺が退治してやる。」と言うた。

その晩、堂様の中で、だとんぼは、頭にかなばちをかぶって、ペンコペンコ弾いていた。そうしててんご（手拭）に石を包んでおいたてや。その中にだんだん夜が更けて夜中になったてや。ほうすると、大風が吹いて来たかと思うて、こんだは生臭い風が吹いてくるてや。そうして、でっこい声で「そこにいる奴は何もんだ。」と、何かがおどしつけるてや。ざとんぼは、「おれはかなばちのばけもんだ。お前は何もんだ。」と言うたれば、「俺はこのお堂にすんでいるばけもんだ」と声がしたてや。ざとん、「そんならば、どっちのばけもんが強いか、たたきっくら（叩きくらべ）をしよう。」と言うたら、ばけもんは「お

ーし」と言うたてや。

そうして、けんをぶって勝ったもんから、先きにたたくことにした。先ず、ざとんぼが手でばけもんをバチャンとたたいた。今度は、ばけもんがざとんぼをたたいたら、手がいたくてたまらんてや。そうして、「お前は何でそんなに固いのだ」ときいたので、「俺は夏の暑い時に川へ入ったり、砂かぶったりして、体をほして固くしたのだ」と言うたてや。こんどはざとんぼが、てんごの石で力まかせにたたきつけたら、ばけもんが「うーん」とうなってすぐだまってしもたてや。夜が明けて村の人が来て見ると、でっこい蜘蛛が鉢巻してうなっていたので、ンなで殺したてや。いきがポーンとさがった。

こめとぬか　（一）

昔、あったてや。

あるところに、ぬかという子があったてや。生れてすぐ母親が死んでしもて、それから代りの母親が来た。間もなく生まれた子にこめという名をつけた。母親は、こめばかりを可愛がっているてんがな。

或る日、二人の子供を栗拾いにやることになった。こめには米団子を、ぬかには糠団子

をあつけ、また、袋もこめにはいい袋をあつけ、ぬかには破れた布れ袋をあつけて、栗拾いにやった。

山について二人で栗拾いを始めた。ぬかが拾う栗は、袋がやぶけているので、ンな落ちてしもう。こめはその後から、ンな拾うてしもうてんがな。

お昼になったども、ぬかの袋は空っぽで、こめの袋はいっぱい拾った。昼食を食うとて出してみたれば、ぬかは糠団子、こめは米団子が入っていた。そこで、ぬかは米団子が食いたいので「俺にも一つくれ」と言うたが、こめは「やらべんこ」と言うて、一つも呉れなかった。ぬかは仕方がないので、糠団子を食うとしたら、手っぱずれてて、コロコロところがり落ちて行くてや。ぬかは「団子待ってくれ、団子待ってくれ」と言うて、団子の後をぼっかけて行った。団子は下へ下へところがり、ぬかはぼっかけていくと、地蔵様が立っていられた。

「地蔵様、地蔵様、ここへ団子がころがりこんで来なかったか」と聞いたら、地蔵様は「団子はころんで来たが、俺が食てしもた。その代り、お前はいい子だから、宝箱をやろう。この箱は何でものぞむもんが出てくる」

と言われて、その箱をもろたと。そこで、ぬかが「砂糖団子出れ」と言うたら、見るからにうまそうな、甘い砂糖団子が出て来たてや。

ぬかが喜んで、その砂糖団子を食うていると、こめが、「お前は、そんげな、うまそうな団子をどっから持って来た」と言うた。ぬかが「地蔵様からもろうて来た」と言うたら、「俺にも半分くれ」と言うたので、ぬかはよい子だから、こめにも半分くれたてや。

家へ帰ると母親が、こめには栗めしをして食わせ、ぬかには糠団子ばっかくわした。ぬかは栗飯が食いたいが、食わせられないので、宝箱から「栗飯出れ」と言うて、栗飯を出して食た。

翌日は豊年祭で、こめにいいきもんを着せて、母親は、こめばっか連れて、お祭り場へ行った。行ぐ時には、ぬかに仕事をいいつけて「お前は留守居をして、せいふろの火でもたいていれ」と言うたてや。

ぬかがせいふろの火をたいていると、そこへ地蔵様があらわれて、「お前もせいふろに入り、いいきもんを着て、お祭り場へ行くがいい。」と言われた。そこで、ぬかは、せいふろに入って、宝箱からいろいろなもんを出して、白粉をつけたり、きんしゃのきもんをきたりしたれば、別の女の子のようになって、お祭り場へ行ったてや。

ぬかは、もとからいとしげなのに、いいきもんを着て、けしょうをしたので、人がたんまげて見ていたてや。隣村のおやさまの人がぬかを見て、「お前はどこの子だ」と言われたので、「ありんどんの子だ」と言うたてや。、お祭り場で、こめを見たので、花餅を買

うてくれたてや。こめは、母親に、「おら、ぬかによう似た、いいきもん着た、いとしげのあねさから、花餅を貰うてもろた。」ときかした。

そうしてぬかは家へ帰ってくると、また、地蔵様があらわれたので、ようく礼を言うたてや、地蔵様は、「これからお前に大変な福がさずくので、もう、この宝箱も用はない。」と言うて持っていかれたてや。

その次の日になると、村のおやさまと隣村のおやさまが来られて、「ここんちにぬかという子がいるが、嫁にくれ」と言われた。母親は、「それは、ぬかでなくてこめだろうの。ぬかは、きんなはお祭り場にも行かぬし、こめがお祭り場に行ったがんだの。」と言うた。隣のおやさまは、「そうか、それでは二人の中、唄の上手なのを貰っていぐ、また、その中にくる。」と言うて帰った。

そこで母親は、こめには一生けんめいで唄をきかせ、ぬかにはいっこうと聞かせないてんがな。こめはいくらきかしてもきかしても覚えられない。唄は追分だと。ぬかはわきったまできいて、みんな覚えてしもた。

隣のおやさまの来る日になって、こめがうたった。

「今日の猫の糞、いきがたって、ホヤホヤ」

今度は、ぬかがうたったが、追分けを上手にいい声でうたったてや。

隣のおやさまは、「これこそ、おらちの嫁だ。」と言うて、ぬかをつれて帰られた。それからぬかは、一生安楽に暮した。いきがポーンとさがった。

一〇 鬼とお嬢さん

昔、あったてや。

昔ある村のおやさまに、まことにいとしげのお嬢さんがあったてや。お嬢さんは気立のやさしい、親切な子であった。

或る時、村の鎮守様にお詣りにったれば、おっかない鬼が三四、鉄の鎖にしばりつけられてつながっていたてや。その鬼どもは、もうすっかりやせて力がなく弱っていた。そこでお嬢さんは、まことに気の毒に思うて、でっこい握り飯を三つ、家から持ってきて、一つづつ鬼にくれた。すると、鬼は元気になって、強い力を出して、その鉄の鎖をきってしもた。そうしてお嬢さんをさらって、山へ逃げて行ってしもたてや。

さあ、家では大騒ぎ。どうしたらよかろう、相手は鬼だ、しかも黒山という奥山にいるがで、そこまではよういなことではいかれない。と言うて大困りだった。

そのおやさまに、権助という正直もんの若い衆がいたてや。権助は、「旦那様、俺が黒

山へ行って、お嬢さんを連れて参りましょう。」と申し出たてや。旦那様は、「おー権助、それは有難い。まかりまちがえば、お前の命取りになるから、よう気をつけて行ってくれ。娘を連れてきたあかつきには、お前をおらちの聟にする。権助、頼む。」と言わしたてや。

そこで権助は身ごしらいをして出かけた。野を越し山を越して、さんざん苦労して、黒山についたてや。そしたれば鬼共は留守で、お嬢さんばつかりだったてや。権助は大変に喜んで、「さあ、権助が迎えに来ました。早うこの山から逃げましょう。」と言うた。するとお嬢さんは、「いやいや、そんなに、じょうさもなく逃げ出すことはできん。この山には、人が来ると一人に一りんづつ咲くつつじがある。お前が来たのでまた、ひとつぱ、わたしのと合わせて花が二つぱ咲いているのだ。それだから、鬼どもは帰ってくると、必ずわたしをせんぎするだろう。その時には、わたしが上手にだまらかして、酒を飲ませて酔わせてやる。そのすきに、この山にある車に乗って逃げ出そう。ここにあるのが一日に千里を走る千里の車、そのわきにあるのが、少し小さいが一日に五百里走る車で五百里の車、この五百里の車は、千里の車の半分しか走らぬが、その代り、山の上でも、川の中でもどこでも走る都合のよい車だから、これに乗って逃げましょ。万事、わたしにまかせてください。」と言うたてや。

その中に、鬼どもがドヤドヤと帰って来たてや。そうして二つぱ咲いたつつじの花を見て、すぐお嬢さんに聞いたてや。「見ればつつじの花が二つぱ咲いているが、誰か人間が来たな。誰が来た。かくすとためにならんぞ。」と言うたてや。お嬢さんは、「こんな奥山に、人間の誰が来るもんでしょう。わたしがさらわれてこの山にくる前から、身持ちになっていたので、やがてその中に子供が生まれるようになったので、つつじが二つぱ咲いたのでしょう。」と言うたてや。

これを聞いて鬼共は安心して、いつものように、酒をたらふく飲んで、さんざんに酔っぱらって、ンナ寝てしもたてや。

そこでお嬢さんは、「権助、このまに早う逃げよう」と言うたてや。権助は、「俺がこの山にくる時に、お寺から魔よけの三枚の札をもろて来てあるので、これがあれば大丈夫だ」と言うて、二人は五百里の車に乗って逃げ出した。

やがて、たいがいになって、鬼共が目をさますと、お嬢さんがいない、ふしんに思うてそこらを探したれば、五百里の車もない。鬼共は、「さては逃げたか、それ、後をぼっかけろ。」と千里の車に乗って、後を追いかけた。千里の車にはかなわん、やがて追りつかれそうちなったので、権助は、一枚の札をとりだして「大山になーれ」と投げ出した。見る見る中に大山ができた。千里の車はこの大山を越すには、なかなか手間がかかった。そ

の間に五百里の車は先へ先へと進んだ。やがてまた追いつかれそうになったので、「大火車になーれ」と言うて一枚の札を投げた。あたりが一めんの山火事になったところを、千里の車はまごまごしている。また、追いつかれそうになったので、「大川になーれ」と最後の札を投げたてや。そうしると大川が出た。鬼共がその大川に手間どっているこまに、二人はずっと先へ進んだ。やがてまた、追いつかれそうになったが、もう札も何もない。そうしたれば、お嬢さんが、鬼の方にむけて、けつをくるっとまくってたたいて見せたてや鬼共はおかしくて笑い出した。あんまりおかしくて車から鬼どもは落ちてしもたてや。このすきにとうとう家へ逃げて来たと。そうして家へ来てから、鬼の大嫌いなよもぎとしょうぶを、家の門にさしておいたてや。よもぎは鬼まきの焔と言うて、また、しょうぶは鬼きりの剣と言うて、鬼どもがおそれて近づかないもんだてや。

やがて鬼どもは来たが、よもぎとしょうぶにおそれて、五百里の車を持って、千里の車に乗って逃げてしもた。さて、権助は約束通り、おやさまの聟になって、一生楽々と暮したてや。いきがポーンとさがった。

ぐつとばた

昔、あったてんがな。或るところに、かっかとぐつという子とばたという子があった。つあつあはもう前に死なれてしもたてんがな。つあつあの法事することになって、かっかがぐつとばたに「なら、お寺様の和尚さんへ時分づかいに行ってこい。」と言うたてんがな。ぐつとばたは、「あい。行ってくるども、和尚さんてやどんげなもんだ」ときいたので、「和尚さんてや、黒いきもんを着ているもんだ」ときかしたてんがな。

そこで、ぐつとばたは、お寺様へ行ったら、門に、からすが止っているてんがな。これが和尚さんかと「和尚さん、和尚さん、おときの時分がいいから、来てくんなんしょ」と言うて帰って来たてんがな。

家にくると、かっかが「和尚さんは何といわれた」と聞かれたので、「和尚さんは門のとこで、カアカアと返事しられた。」と言うた。かっかは仕方がないので、「おらがお寺様へ行ってくるから、なら二人で、この鍋の火をたいていれ」といいつけたてんがな。

その中に、鍋が煮えてきて、ぐつばた、ぐつばたと音がして来た。そうしると、ぐつとばたは、「おい、おい、おい、おい」と返事したが、いつまでたってもきりがないので、

鍋をおろして、おにやへほん投げてしもたてんがな。

かっかが帰って来たが、和尚さんにあげるごっつおがないので、二階から甘酒のかめをおろすことにしたてんがな。そこで、「ぐつもばたも、けつをしっかりおさいていれ」と言うたれば、自分のけつをおさいているてんがな。かっかが「いいか、おろすぞ、けつをおさいたか」と言うたれば「あ、しっかりおさいているで」と言うたので、甘酒のかめをおろしたれば、かめが割れて、中の甘酒がンなこぼれてしもて、おときのごっつおにならんかったてんがな。いちがぶらんとさがった。

米と糠（二）

昔、あったてんがな。米と糠の二人の女っ子があったてや。米は今のかっかの子で、糠は亡くなった前のかっかの子だと。かっかは糠をにっくがって、米を可愛がっていたてや。つあつあはよそへ働らきに行かれて留守のがんだと。

或る秋の日に、かっかは二人に山へ栗拾いに行ってこいと言うて、米にはいい袋をあつけ、糠には、けつの破けた悪い袋をあつけたてや。

二人は山へ行って栗拾いした。糠の袋は、いくら拾うても、ちっとも栗がたまらんてや。

日暮れになって、糠はやっと気がついて、泣いていたてや。そうしたれば、米は心のやさしい、よい子で、自分の拾うた栗を半分くれて家へ帰って来たてんがな。

かっかは糠が米と同じ位に栗を拾うて来たので、いじめてみようがない。そっりゃだんが、なお更、につくなって、寝る時に米を米の中に入れて、糠を糠の中に入れたてや。そうしたらば、米はしゃっこいので、米は死んでしもたし、糠はあったかいので、糠は生きていたてんがな。いちがぶらんとさがった。

雲雀

昔、あったてんがな。雲雀は紺屋（そめものや）をしていた。天道様が緋の衣を染めてくれというて註文したので、雲雀はきれいな緋の衣を染めてやったてんがな。天道様はいっこうと金を払わない。いくら催促してもよこさん。その中に雪が降って冬となり、春の雪消えを待って、天道様のところへ、空を舞い上って金の催促に行くがんだと。

「天道につくや、金なせ、金なせ」というて催促する。すると天道様が、

「何だ」と言うて大きな声で叱るてんがな。雲雀は叱りつけられて、空から逆落しに地べたにおちるがんだてや。それでもあきらめ切れずに、またも空を上って、

「天道につくや、金なせ、金なせ」と催促に行くがんだと。イキはポーンとさけた。

53 鷲と熊

昔、あったてんがな。あるとこにお宮があったてや。お宮の杉の木に、鷲が毎年巣をつくって卵を生んでいたてや。ところが毎年、山から熊が出て来て、卵をンな取ってしもうので、鷲が困って鳥の仲間に相談したてんがな。そうして誰か熊を退治してくれるもんはいないかと言うたれば、チャッチャヤッ（みそさざい）が、おれが退治してくれると言って杉の木の葉かげにかくれて熊のくるのを待っていたてや。そうすると熊が現れて来ただんが、（チッチャヤッは熊の耳の中へ、すぐ飛びこんだてや。熊の耳の中を、あっちを突っつき、こっちを突っつきしたれば、熊は苦しがってとうとう木から地べたにほげすり落ちて死んでしもたと。そうしたれば鷲がこったい喜んで、お前に何をお礼してよいかわからんすけ、と言うて、チャッチャヤッの体へ、にがい薬を入れて他の動物がチャッチャヤッをとってくわんないようにしたと。いきがポーンとさけた。

54 鶴と亀のよび合い

昔、あったてや。あるところに鶴と亀があってゴッツォのよび合いをすることにした。先ず鶴が亀をよぶことになった。鶴はゴッツォをして深い壺の中に入れて用意していた。亀が喜んでよばれて来た。鶴はさあさあとゴッツォを亀にすすめて、自分もくちばしを壺の中に入れてうまそうにして食ているてんがな。亀も食おうとして首をつっこんでみたが壺なので首も短く食うことが出来んてや。鶴一人がムシャムシャ食ているのをくやしげに見ていたてや。よし、今度は俺も困らせてくれると思うたてや。

こんどは鶴が亀のところへよばれていぐことになった。亀はゴッツォをして、平の鉢の中に入れて用意しておいたてや。そこへ鶴が喜んでよばれて来た。亀はさあさあとゴッツォを鶴にすすめて、自分も鉢の中をなめてうまそうに食ているてや。鶴も食おうとして、くちばしで鉢のゴッツォを食おうとしたども、食うことができん。亀一人がヒシャヒシャと食ているのをうらやましげに見ているばっかだと。いきやぼっこり。

狐

昔、あったてんがなあ。或る村にトッツァとカカがすんでいたてんがなあ。トッツァは毎晩遊びに出るてんがな。

或る晩のこと、トッツァは夜遊びに出て暫く立つと、もう帰って来た。「遊びに行ったども、いっこうと面白うねえから帰って来た。カカや、アブラゲマンでもたいてくれ。」と言ったてや。そうしてマンマたいて食わしたと。

トッツァの顔を見ると、左の眼が目っこだてんがな。はてまあ、おかしいな。おらとこのトッツァは右の眼が目っこな筈だが。さては、こいつめ、山の狐がトッツァに化けて来たなと思ったが、知らんふりをしていた。

その中に、ほんとうのトッツァが帰って来たら、狐はどっかへ行ってしもたと。そこでトッツァに今夜のことを話して、あしたの晩に、また、きっと狐がくるが、どうしたらいいだろう。二人は相談して、トッツァは夜遊びに行ったふりをして、家に隠れていることにしたてんがな。

次の晩げになると、やっぱり狐がトッツァに化けて来て、アブラゲマンをたいてくれと

言うたてんがな。カカは「アブラゲマンマをたいてもよいが、お前はいつも袋の中にはいるはいると言われるすけえ、おら、いやだんし」と言うたれば、狐は、「おら、袋の中にはいるなんと言わない。」と言うたてんがな。それでアブラゲマンマをして食わせた。食うたれば狐は「カカや、おらを袋の中に入れてくれ」と言うたと。「カカは、「袋の中に入れてもよいが、お前はいつも、袋の中へはいると、上の方をくびれと言われるすけえ、おら、いやだんし」と言うたと。狐は「そんげんこと言わん。」と言うたてんがな。

そこで、袋を袋の中にいれたれば、狐が「カカや、袋の上をくびってくれ」と言うたと。カカは「くびってもよいが、お前は何時も、上をくびると叩け叩けと言われるすけえ、おら、いやだんし」と言うたら、狐は「おら、たたけなんと言わん」と言うたてんがな。そこで、袋の上をくびると、狐が「カカや、袋の上から叩いてくれ」と言うたてんがな。そうすると、かくれていたトッツァが出て来て、袋の中をキツを叩き殺したてんがな。いちがブランとさがつた。

56 鶴と亀

昔、あったげろ。あるとこに亀があったげろ。或る日のこと、日向ぼっこをしていると

ころへ、鶴が飛んで来た。そこで亀が鶴にものを申した。

「鶴千年、亀万年と言うて、お前は俺より子供だが、羽根があるばっかりに、手前の好きなように空を飛んであいている。俺は万年生きても、羽根がないばっかりに、空をちっとも飛ぶことができん。鶴どん、鶴どん、一つ頼みがあるが聞いてはくれまいか。どうか頼むから俺を天上へ連れて行ってくれ。」

そこで、鶴が

「亀どん、亀どん、なじょうも天上へつれていってやろう。この棒をお前の口で、しっかりくわいていれ。その棒を俺もくわいてつれていってやる。いいかな。どんげんことがあってもお前、さべってはならんぞ。もしもさべったら、まっさかさまに下へ落ちてしもうぞ」と言うたげろ。

「そんげん事は訳のないことだ。俺は決してさべらん。」と言うたげろ。

そこで鶴と亀はフワフワと空の天上に舞い上ったげろ。或る村の上にかかると、村の子供が見つけて、

「何だ、何だ、あれは。鶴と亀だ」。

と騒ぎたてた。そこで亀が、つい

「ねら、いらんことを言うな。」と言うた拍子に、くわいていた棒から離れて、まっさか

さまに地べたにおちてしもたげろ。イキがポーンとさけた。

古屋の漏り（一）

昔、あったてんがな。爺さと婆さがあって、馬一匹飼っていたと。或る寒い晩、山の狼が、この馬を食おうとて、こっそり忍びこんでいた。そうして爺さと婆さが話をしているのを聞いていたてんがな。

「ごうぎ寒い晩だが、こんげの晩にや狼が山から出てくるかもしれんが、おっかないこんだ。のう、爺さ。」

「何に、狼なんぞはちっともおっかなくはないが、この世でいっちおっかないもんは、古屋の漏りだ。古屋の漏りほどおそろしいもんはない」

狼はこれをきいて、「この世の中で俺ほどおっかないもんはないと思うていたに、古屋の漏りがいっちおっかないとは、一体、古屋の漏りというのはどんげなもんだろ。」とたんまげて、これはこの家にまごまごしていられんわい、と外へ逃げ出した。そこへまたこの家の馬を盗もうとて馬盗人が入ろうとしたが、狼の逃げ出すのを馬だと思うて、狼の耳をつかまえて馬のりに乗ったてや。そうしたれば狼はさあ古屋の漏りが俺に乗りやがったと

う て、 山めがけて一散に走り出した。 馬盗人は狼があんまりごうぎに走るので、 落っては大変だと、 なお更のこと耳にしっかりつかまっていた。

その中に夜も明けて、 よう見るとでっこい狼に乗っているので、 このまんまだと狼につれていかれたら、 こいつはたまらん、 とすぐとび下りて、 そばの穴ん中へ入りこんだ。 狼は狼で、 古屋の漏りが俺の穴の中に入ってしまったのでこれは一大事だ猿どんのとこへ相談に行った。 猿が、

「猿どん、 猿どん。 お前の尻尾は三十三ひろあるというが、 その尻尾でからまいて、 古屋の漏を穴の中から出してくれ。」と言うたと。

猿が言うには、

「俺のしっぽは長くてふくずっていがんないすけ、 んなして輪っこにからがいて、 かつねて来てくれ。」

それで、 よいさよいさでかつねて、 穴んどこへ来て、 猿が尻尾をそろそろと入れはねた。 穴ん中では馬盗人が、 これは有難い猿の尻尾だと、 ぶらさがって力いっぱいにひっぱり出した。 猿はたんまげて抜ごうとしたども一向と離さないてや。 そうして引っぱり合いをしている中に、 三十三ひろもあった猿の尻尾が、 ブットンと根元から切れて、 今のように短くなってしもたてや。 そん時に猿が真赤な顔して力んだので、 今も赤い顔をしているがん

だ。そうして馬盗人は穴の中から出ることができんかった。いちがポーン。

古屋の漏（一）

あったてんがな。或る金持ちの家でよい馬を買うたてや。そこで馬喰が金は受取ったが、馬が惜しいので、或る晩に馬盗人に行ったてや。その時、猿もその馬を食いに来ていたてや。そこの家の親父が、子供を小便しに起きたてや。そして子供が、「この世で猿が、いっちおっかないんだろうかのし。」と言うたてや。すると親父は、「なあに、あんがいんもんなんて俺がまさかりで頭をたたけゃ死んでしもうや。」と言うてたや。子供は、「そいじゃ、この世で何がいっちおっかないんだい。」ときいた。そうすると、親父は、「この世でおっかないもんは、米ぶつの舌出しと古屋の漏りだ。」と言うた。父、子供は、「そりゃば、そのおっかない古屋のもりてや、どこにいるんだい。」ときいた。親父は、隣の家にいらや、油断をすると、おらちにもくらや。隣のとっつあはどうずりもんでいつも米がなうて、米びつが舌（下）を出して泣いていらあ。雨が降ると古屋で家中が漏らあ。米びつの舌出しと古屋の漏りが、いっちおっかない。」と言うたてや。猿がそれをきいて、そんなおっかない奴がいちゃ、俺もかなわんと思うて逃げ出したてや。馬喰は、それを馬

だと思うて、狼の上に乗ったてや。狼は、こりゃ大変だ、古屋の漏が俺の背中に乗ったと思って、一目散に逃げ出したてや。

この馬を逃がしてはなるものかと、馬喰は、狼の耳をしっかとおさいて乗っていたてや。

さて、夜が明けて見ると、おっかない狼だったので、馬喰はどうして逃げようかと思うていると、ちいんこのほぐら堂があったてや。そこで馬喰は狼からとび下りてそのほぐら堂に逃げ込んだてや。狼は、古屋の漏がほぐら堂に入ったと思うて、早速、山のけだもんを集めて大相談したてや。

「こんげのおっかないもんが、この山にいちゃ、我々共は楽々していられん。くじをひいて当ったもんが、このほぐら堂の中の古屋の漏をよく見届けることにしよう。」と言うたてや。兎が一番くじに当った。そこで兎は堂様の格子の中へ尻尾をつっこんでなでまわしたところが、馬喰は兎の尻尾をしっかりとおさいてしもた。 そこで兎は馬鹿力を出して引っぱったら、尻尾が切れて、おまけに前につんのめった。そうして口が割れて三つ口になって物を言うことが出来なくなってしもたてや。

猿が二番くじに当ったてや。

猿が格子の中へ尻尾を入れてなでまわすと、又、馬喰がしっかりとつかまったてや。猿は驚いて、でっこい声でキャッキャッと言っておっかながったてや。

そこで、山のけだもんは、みんなおっかながって逃げてしもたてや。猿はますます力を入れて尻尾を引っぱると、根本から切れて、尻餅をついた。その拍子に尻の皮がむけて真赤になった。それから猿は尾もなく、尻が真赤になったてや。猿はあんまりおっかなくて、木の上に逃げ上ってしまった。馬喰は漸く堂様から出ることが出来たが、悪いことをしようとしたばっかりに、命を三年もちぢめたような思いがして、悪いことてやならないもんだと思うたてや。いきがポーンとさがった。

鬼の面

昔、あったてや。或る村に皮作どんという家があったてや。そこの家にはツァツァともさじという男の子の二人切りで、毎日、たきもんを町に売りに行っては米を買って暮していた。

或る日のこと、いつものように、もさじはたきもんをぶて町へ行ったてや。店の鬼の面がほしくなって買ってしまったら、もう米を買う銭がなくなった。

家へ帰って、ツァツァが米を買って来たかと言われたので、鬼の面を出したてや。ツァツァは怒って、「お前のようなもんは家におかん。その面を持って、どこへでも行くがいい。」と言われて家をかんどうされたてや。

もさじは仕方がないので、家を出た。その中に夜になったので、あるお宮の二階に泊っていた。その中に、「今晩は」などと大勢の入がガヤガヤ集って来たてや。もさじは、はて、何だろうと不思議に思うていたてや。すると、「たいがい集ったから始めよう。」と言い出して、勝負ガラガラ、勝負ガラガラという声と音がするてんがな。さては俺をしょびするのかと、ガタガタふるいていたてや。また勝負ガラガラと始ったので、鬼の面をかぶってこっそり逃げ出そうと下へ降りたら、ばくちこきはたんまげて、金をみんなおっ放して逃げてしもたてや。もさじはその金をぶて、家へ帰ったてや。いちゃぼっこり。

鳥ととんび

昔、あったてや、とんびは紺屋（そめもの屋）なので、或る日、鳥が頼んだてや。「とんびの着物のように、きれいなかたをつけて染めてくれ。」ところが、とんびは間違って鳥の着物を真黒に染めてしもたてや。それから鳥ととんびは仲が悪くなって、何かというとすぐに喧嘩するのだてや。それで、子供が、とんびと鳥を見ると、

「鳥の着物は墨染だ
　とんびの着物はかたばっかだ」

と歌うがてや。いきがポーンとさがった。